中等新讀本 卷二

375.9
Fu10
貴重書

41411
教科書文庫
4
810
41-1922
200030
1920

資料室

大正十一年二月六日
文部省檢定濟
中學校國語科用教科書

375.9
FU10

文學博士藤村作著

中等新讀本

廣島大學圖書之印

廣島大學
教
26426
圖書

發行　大日本圖書株式會社

生徒諸子へ

一　本文中＊の記號を附した語句には、卷末に說明註釋を掲げてあります。

一　比較的にむづかしい字・語・句等を上欄に摘出して、記憶の便に供してあります。

其の中に、漢字の下の括弧內に示してあるものは、其の漢字の部首で字書を引く時の便宜に設けたのであります。

語尾の變化する語は辭書に出てゐる形で出してあります。

大正十年十月

編者

中等新讀本　卷二目次

一　日本民族の理想……一
二　村上義光……七
三　お祭(童謡)……一三
四　愛犬　一……一九
五　愛犬　二……二三
六　山口峠の危難……二七
七　繪葉書だより……四二
八　アブラハムリンカーンの少年時代　一……四六
九　同上　二……五二

一〇　アルベール皇帝……五七
一一　思出……六三
一二　母の手紙(書牘文)……七四
一三　ローレライの巖……七九
一四　爾靈山攻撃　一……八六
一五　爾靈山攻撃　二……九三
一六　爾靈山……九六
一七　北條時宗の膽勇……九九
一八　金剛山……一〇三
一九　茶道の義氣(常山紀談)……一〇八
二〇　英雄の半面……一一一

二一　酒井忠勝……一一八
二二　扇の的（韻文）……一二二
二三　學生日記……一二七
二四　蛙……一三三
二五　古寫眞……一四〇
二六　貧窮の利益……一四五
二七　麥笛……一五一

帝國大學圖書之印

中等新讀本　卷二

文學博士　藤村作編

一　日本民族の理想

國民も猶個人の如く、寸刻も理想なくして精進することと能はず。我が民族にして、國民的向上を必要とせざれば已む。苟も其の必要ありとすれば、吾人は須らく其の理想を尋繹せざる可からず。敢へて問ふ、我が日本民族の理想とは何ぞや。

忠君愛國は、日本國民一般の宗教なり。如何なる

思想の系統に屬する者も、此の一點に於ては一致するを見る。佛教徒も神道者も基督教徒も、乃至は所謂無宗教家も、均しく此の點に於て綜合せらるゝなり。然らば此の忠君愛國の精神を發揚するの抱負は奈何。

六合

九原

横井小楠は、「富國に止らず、强兵に止らず、大義を四海に布かんのみ。」と言へり。これ實に世界を狹しとする抱負なり。彼が志趣の大にして、六合の中に飛躍したるや知るべし。然れども、尙語りて詳かならず、觀て精しからざる憾なしとせず。所謂大義を四海に布くとは何ぞや。吾人は彼を九原に作して共

虞る

に之を細論する能はざるを惜しむ。

「東西文明を融和して、黃白人種的境域を一掃す可し。」とは、吾人が此の頃屢〻耳にする所なり。されど、我が國民を擧げて、此の如き理想を有せしむるを得可きか。學者の論としては、意義頗る明白なれども、國民的大題目としては、餘りに架空に、餘りに高遠に、小楠の所謂「大義を四海に布く。」と同一ならんことを虞るゝなり。

若し吾人をして所見を陳ぜしめば、「我が民族の理想は唯白閥打破に在り。」と言はんとす。吾人の打破といふものは、其の閥を打破するの謂にして、白人を

鼓吹

提携

打破するの意にはあらざるなり。吾人豈排外思想を鼓吹する者ならんや。蓋し東西文明の融和も、黄白人種境域の一掃も、彼我對等の交際より始めざる可からず、白閥打破は其の第一歩なり。

協和も提携も、對等の交際の後に來る。若し對等の交際を待たずして協和せんか、協和にあらずして降服なり。提携せんか、提携にあらずして服從なり。東西文明の融和も、黄白人種的無差別も、望ましき事なれども、是唯兩者が對等の地位を占めて、而して後之を行ふを得べきのみ。此の如き言議は、之を學者の議論としては、如何に實際と緣遠くとも妨げじ。

攻勢的防禦

之を國民的大題目としては、少くとも是が實行の期待すべきを要す。白閥全盛の現今に於ては、四海兄弟の說教も、聊か早計たらざるなきか。我等の公平無私なる議論も、彼等の耳には弱者の泣言と聞え、公論に託して自個の利益を保持せんとする哀訴・嘆願と聞ゆるに過ぎず。此の如くにして、何の日にか大義を四海に布くべきぞ。

軍事に、攻勢的防禦にあらざれば、防禦の目的は達す可からずと云へり。我が國民にして、進んで白閥を打破するの一大決心・一大覺悟ありて、始めて聊か日本民族の爲に氣焰を吐くを得可きのみ。若し吾

跋扈　辟易

餒う

藉る

人の觀察にして大過なからしめば、彼の世界兄弟の論は、白閥の跋扈に辟易して、其の保護色の下に隱れんと欲する者の口實にあらざるなきか。東西文明融和論も、競爭の難きを恐れて作り出したる體の善き遁辭にあらざるなきか。果して然らば、其の言徒に誇大にして、其の氣頗る餒ゑたるものにあらずや。

惟ふに、藩閥打破は、我が明治維新當初以來、民論の合言葉なりき。如何に其の有力なりしかは、今尚之に口を藉りて政界に横行せんとする者あるにても知るべし。而も此の打破に由りて、我が國民は、政權を二三藩閥者流より、天下萬衆に分配するを得たり。

カゴミ各務支考

今や白閥の勢力は藩閥の比にあらず。日本民族の眞價は、只此の理想を如何なる程度まで達し得るかによりて定まる。吾人は白人を敵視せず、白人を憎惡せず、彼等若し我等を兄弟とせば、我等又彼等を兄弟とせん。彼等若し我等を親愛せば、我等又彼等を親愛せん。所謂白閥打破は、我等と彼等と平等界に協同生活を樂しむに至る階梯のみ。

（德富猪一郎）

二　村上義光*

「歌書よりも軍書にかなし。」と云ひけん、その吉野山にあはれをとどめたる武夫の中にも、村上義光の最

期最も壯烈なり。

元弘の役、官軍敗れて、後醍醐天皇は隱岐に移され給ひぬ。護良親王は叡山より奈良へ落ちのび、般若寺に潛みたまひしが、賊兵五百騎に圍まれ、危き御命を辛くも經函の中に拾ひ給ひ、わづか九人の從臣をつれて、熊野の方におち給ふ。村上義光はその九人の中の一人なり。熊野も心もとなく思はれしかば、路を轉じて、十津川の奥に半年ばかりは潛み給ひしが、こゝもうき世の數に漏れざりければ、終に吉野に據り給ふ。

賊將二階堂貞藤、大軍を率ゐて來り攻む。親王の

賊方に附く
岩角丸

兵小勢なれどもよく防ぎ、七日七夜奮鬪する程に、敵は辟易し、遠退きて城を圍む。然るに賊に城の案内を知れるものあり。賊軍夜ひそかに城後の金峰山より忍び入り、夜明けを待ちて鬨の聲をあぐ。城兵必死に防ぎ戰へども、衆寡敵せず。今はこれ迄なりとて、腹かき切りて死ぬるもあり、敵とさしちがへて死ぬるもありて、殘れる兵は

追手
木戸

わづかになりけるに、城に火起れり。賊は勢に乘じて突進し來り、親王のおはせる藏王堂にうち入る。親王も是を最期と覺悟し給ひ、二十餘人を從へて出でて奮闘し給ふ。賊その勢に辟易してひきかへす。親王藏王堂に入り、幕引廻して最期の用意し給ふ處に、追手にありし村上義光、數條の矢を負ひながら走り入り、「二の木戸やぶれ候へば、二の木戸にてくひとめ戰ひ候ひけれど、宮の御事氣にかゝり候まゝに、歸り參りて候。今はこれまでと覺え候。幸に敵も亂れて候へば、今のうちに一方より落ちさせ給へ。臣はこゝに留りて防ぎ申さん。それにつけて恐多く

物具
鎧直垂（土）
股肱（肉）

は候へども、召させ給へる御物具臣に下し賜はば、臣御名をおかしまつりて、御命に代りまうさん。」と申上ぐ。親王きこしめして、「そはうれしき志なれども、汝一人を殘していづくにか行かん。」とのたまふ。「臣の如きものの一命はまうすに足らず。天下の事かゝりて御身の上にあり。今は命をすて給ふべき時にあらず。はやく落ちのびさせ給へ。御物具ぬがせ給へかし。」とまうすに、親王も已むを得ず、鎧直垂までぬぎかへさせ給ひ、「あはれ義光、汝よく聞け。汝は我がためには股肱たり。今汝のすゝめに任せて、ここに別るべし。われ若し生きながらへたらんには、

弔(ふ)ふ
冥土
櫓
卿(ぴ)

必ず汝の後生を弔ふべし。もしまた敵手にかゝらば、冥土までも同じ途に伴なはん。」とて涙をぬぐはせ給ふ。「早く、早く」とすゝめまつるに、さらばとて南の方に落ちゆき給へり。

義光は親王の御物具を身につけて、二の木戸の櫓に上り、親王の御姿見えぬやうになるまで遙に見送り參らせ、大音をあげて、「一品兵部卿護良親王、逆臣のために滅ぼされ、唯今自害するなり。」と呼ばはり、鎧をぬぎて櫓の下に投下し、錦の直垂ばかりになり、肌おしぬぎ、腹十文字にかき切り、腸つかみて櫓の板になげつけ、太刀をくはへて打伏したり。賊はまことに親王の自害し給ひしなりと思ひて、われさきにと圍をときてかけ入る。そのひまに親王は、敵の目をのがれておちのび給ひぬ。

嗚呼、忠なる哉、勇なる哉。「花は櫻木、人は武士。」櫻の名所の吉野山に、身を以て主に代りし村上義光は、げに日本武士の花なりけり。

（大町桂月）

三　お祭（童謡）

わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。
祭だ、祭だ。

半被

脊中に花笠、
胸には腹掛、
向う鉢巻、そろひの半被で。
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。
神輿だ、神輿だ。
神輿のお練りだ。
山椒は粒でもぴりつと辛いぞ。
これでも勇みの山王の氏子だ。

わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。
眞赤だ、眞赤だ、夕燒小燒だ。
しつかり擔いだ。
明日も天氣だ。
そら採め、採め、採め。
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい、

わつしよい、わつしよい。
おいらの神輿だ、死んでも離すな。
泣蟲やすつ飛べ。　差上げて廻した。
揉め、揉め、揉め、揉め。
わつしよい、わつしよい。

鬼灯

わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。
廻すぞ、廻すぞ。
金魚屋も逃げろ、鬼灯屋も逃げろ。
ぶつかつたつて知らぬぞ。

そら退け、退け、退け。
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。
子供の祭だ、祭だ、祭だ。
提灯點けろ、
御神燈獻げろ。
十五夜お月様まんまるだ。
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。
あの聲何處だ、
あの笛何だ。
あつちも祭だ、こつちも祭だ。
そら揉め、揉め、揉め。
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。
祭だ、祭だ。

山王の祭だ、子供の祭だ。
お月様紅いぞ、御神燈も紅いぞ。
そら揉め、揉め、揉め。
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。

（北原白秋）

四　愛犬　一

私は生來の朝寢坊だから、毎朝二度・三度起されて、不承々々に床を離れるが、ポチは朝起だから、もう其

の時分には、疾くに朝飯も濟んで、一しきり遊んだ所だが、私の聲を聞付けると、何處に居ても、一目散に飛んで來る。

これで私の機嫌も直る。急いで庭へ降りる所を、ポチがすかさず泥足で飛びつく。細い人參程の尻尾を、懸命に掉立てて、嬉しさうに顔を見上げる、見下す、目と目とぴつたりと合ふ。たまらなくなつて、私が横抱きにする。ポチは抱かれながら、身をもがいて、大暴れに暴れ、私の手を舐め、胸を舐め、頰を舐め、舐めても舐めても、舐め足らない。考へて見れば、汚いやうではあるが、併し私は嬉しい。「毎朝これでは着

掉る

舐む

物がたまらない。」と、母はそれをこぼすけれど、私は着物の汚れを厭つて、ポチの此の志を無にする事は、如何しても出來ない。

ポチも「やつとこれで氣が濟んだ。」といふ風で、また庭先をうろ〳〵し出して、緣の下などを覗いて見る。と、其處に、草鞋蟲の一杯たかつた古草履の片足が何かがある。「好い物を見附けた。」と言ひさうな面をして、それをくはへ出して來て、首を一つ掉ると、草履は横飛にポンと飛ぶ。すかさず追つかけて行つて、又くはへてポンと拋る。そんなたわいもない事をして、活潑に元氣よく遊ぶ。

隙（皐）

捉まへる

其の隙に私は面を洗ふ、飯を食ふ。其が濟むと、今度は學校へ行く段取になるのだが、此の時が一日中で、一番私の苦痛の時だ。ポチが後を追ふ。うつかり出ようものなら、何處迄も何處迄も、隨いて來て、逐つたつて如何したつて歸らない。こつそり出ようとしても、出掛ける時刻をちやんと知つて居て、其の時分になると、何時の間にか、玄關先へ廻つて待つてゐる。仕方がなくて、しまひには取捉まへて、否應なしに、格子戸の内へ入れて置いては、出るやうにしてゐたが、然うすると、前足で格子を引搔いて、悲しい悲しい血を吐くやうな啼聲を立てて後を慕ひ、姿が見

えなくなつても啼止まない。私もそれは同じ想だ。泣出しさうな面をして、ばたく と駈出し、聲の聞えない處迄來て、漸くほつとして、普通の歩調になる。而して、心の中で繰返し繰返し、ポチの事を思ふ。

五　愛犬　二

じやん〳〵と放課の鐘が鳴る。今まで靜かであつた校舍内が、俄に騷がしくなつて、彼方此方の教室の戸が、前後してあわただしく、ぱつ〳〵と開く。と、その狹い口から、物の眞黑な塊がどつと廊下へ吐出され、崩れてばら〳〵の子供になり、我勝に昇降口を

目がけて、駈出しながら、口々に何だかわめく。只もう、校舍を搖つて、「わーつ」といふ聲の中に、無數の圓い顔が、大きな口を開いて、躍つてゐるやうで、何をわめいてゐるのか分らない。で、それが一旦昇降口へ吸込まれて、此處で又ごたく〳〵と入り亂れて、上を下へと揑返したあげくに、わつと門外へ押出して、東西へ散り〳〵になる。

仲善し二人、肩に手を掛合つて行く前に、辨當箱をぽんと拋り上げては、ちよいと受けて行く徒者がある。其の隣には、往來の石塊を蹴飛ばし蹴飛ばし行く。誰だか「後刻で遊に行くよ。」と喚く。「蝗を取りに

喚く　蝗

行かないか。」といふ聲もする。「君、君」と呼ぶ背後で、「馬鹿野郎」と誰かを罵る。「あ痛」「何でい」「わーい」といふ聲が、がや〳〵と入れ違つて、友達は皆道草を食つてゐる中を、私一人は駈脫けるやうにして、側視もせずに、せつせと歸つて來る。

家の横町の角まで來て、擽つたいやうな心持になつて、そつと其の方角を觀る。果して、ポチが門前へ迎へに出てゐる。私を見つけるや、逸散に飛んで來て、飛びつく舐める。何だか「兄さん。」と言つたやうな氣がする。若し本包に、辨當箱に、草履袋で、兩手が塞がつてゐなかつたら、私は此の時ポチをつかまへて、

擽る

何をしたかわからないが、それが有るばかりで、如何する事も出來ない。據なく、頭を撫でてやるだけで不承して、又歩き出す。ポチも忽ち身をくねらせて横飛にひよいと飛んで、駈出すかと思ふと、立留つて、私の面を看て、おどけた眼色をする。追付くと又逃げて、又其の眼色をする。かうして巫山戯ながら一緒にかへる。

巫(エ)山戯る

玄關から、大きな聲で「只今」といひながら、内へ駈込んで、すぐに本包を其處へ抛り出し、あわてて辨當箱を開けて、實は喫べたかつたのを我慢して、半分殘して來たのを、今日のお菜の殘りと稱してポチに遣る。

其でも足らないで、お八つに煎餅を三枚もらつたのを、せびつて五枚にしてもらつて、二枚は喫べて、三枚は又ポチに遣る。

夫から、庭で一しきりポチと遊ぶと、母がきつと「お溫習をおし。」といふ。このお溫習を濟まして、つと外へ出て、「ポチ來い。」「ポチ來い。」と呼びながら、近くの原へ一緒に遊に行く。

これが私の日課で、ポチでなければ夜も日も明けない。

（長谷川二葉亭）

六　山口峠の危難

周到

如何なる急な場合に際しても、常に用心は周到でなければならぬ。「油斷大敵」といふ俚諺の通りで、その油斷から、わしは危く兇漢の刀下に、一命を奪はれようとした事がある。是はわしが大阪に居つた時の話で、佐賀の亂に就いて遣るべき兵が不足したので、鳥尾の命を受けて、和歌山へ舊兵隊を連れに出かける途中の出來事である。大阪鎭臺から、金貨・銀貨取雜ぜて五百圓だけ受取り、跡は出先へ送る事にして、其の五百圓を無雜作にハンケチに包み、下つ腹へ押込んで、八軒屋の播磨屋へ戻つて來たが、店先で車を降りる途端に、彼のハンケチ包を取落したので、金

貨・銀貨が土間一面に散らばつた。出迎へた番頭や女中が拾ひ集めてくれたのを、其の儘包んでわしは鞄一つに短銃一挺、早速旅裝を整へて、三人曳の車を命じた。

春とはいへど、日影は未だ寒い。勢よく車を飛ばして、大阪の街を出離れたのは、午後の四時頃であつた。堺・四ッ池を後に、郊外を縫うて、凸凹道を車に搖られながら、信達の手前へ差しかゝつた頃は日も暮れて、靜かな春の夜の人家は寂寞として、前にも後にも、淋しく車の響を聞くばかりだ。此處から山口峠を越さねばならぬ。この峠は和泉と紀伊の國境に

あるので、車は役に立たぬから、わしは先曳の車夫に、

「貴様は一足先に行つて、四人舁の駕籠の用意をしろ。」と云ふと、

「はい、承知しました。」

と肩綱を外すや否や、一目散に駈けて行つた。程なく信達の驛に着くと、既に駕籠の準備が出來て、四人の駕籠舁が仕度をして待ち受けて居た。

其處で車を乘り捨てて、春の夜寒を厭ふ爲に、軍服を脱いで鞄に入れ、褞袍と着かへ、防寒具に襟を埋め、軍刀は何の氣もつかず、駕籠の竹柱へ縛りつけて、打寛いで出立した。一歩は一歩爪先登りに、幾度か暗い樹立を潜り抜けると、駕籠は何時か山路にかゝつて居る。ぎし〳〵と息杖のきしむ音、さら〳〵と梢を掠める春の夜風。

「あゝ、月が出るな。」

と思ひながら、粗末な駕籠に脊を凭せてゐるうちに、遂うと〳〵と睡氣がさして來た。——何しろ大阪表の連日連夜の談議で、酷く疲れて居たので、知らず知らず瞼が重くなつて來る。すると、先刻から大聲で話合つて居た駕籠舁仲間が、何やら怪しげな符牒で、合圖をして居るのに氣がついた。「はッ」と思うて、彼等の云ふ處を聞いて居ると、

褞袍

凭す

符牒

「おい……峠の上で……宜いか。」

「大丈夫だ……あれを持つて來たから。」

小耳を掠める二言三言に、

「扨は近頃四ッ池邊へ出て、殺人强盗をやる奴等の仲間だな。」

焦眉の急

と感づくと、睡氣も俄に覺めて、心頭只焦眉の急に處すべき手段のみ思ひ浮かんだ。

憎む可き駕籠舁どもは、途々も全然わしが寢込んで居るものと安心して、尙小聲で話しながら、駕籠は山路をとつ〳〵と登つて行く。

「どうしたものか。」

と思ひながら、密と薄目を開いて左右を見遣ると、左手は切りそいだやうな山腹、右手は物凄い谷間の底に、わびしい瀨音が聞えるぢやないか。

此處でうつかり手出しをして、若し駕籠の儘谷底へ投込まれいば、最期である。「宜しッ、峠まで我慢しろ。」と觀念して、舊の儘に、駕籠の中で狸寢入をして居たが、斯う云ふ羽目に陷つたのも、全くわしの不用心から起つた事で仕方がない。鎭臺で受取つた金包の取扱を粗末にして、播磨屋で落したのを惡車夫が見て居つたので、一味惡黨の駕籠舁らに耳打ちして、この峠でわしを殺さうと企てたのだ。何しろ敵は

四人、身方は一人、よし遣付けるにしても、手痍位は負ふだらう。更に一段の不覺と云はねばならぬのは、苟も陸軍武官の職にありながら、軍服を脱ぎ、軍刀を駕籠の柱に縛りつけて了つたので、今急にその武器を取る事は出來ないのだ。

昔、漢の陳平が船中で賊に襲はれた時、身ぐるみ脱いで飛出したと云ふ話があるが、この駕籠舁共も金が欲しさにわしを殺すのだ、金さへ出せば其で宜いのだから、一層懷中の五百兩を投出して遣らうかと思つたが、併し兇漢が果して其で承知するかどうか、毛を吹いて疵を求めるのは馬鹿々々しいし、第一武

官の職に對しても相濟まぬと、暫くわしの最初の不用心を後悔して居た。

併し、何時まで斯くてあるべきで無い。袋の鼠と思つて居る彼等の手中に、貴重な一命をくれてやる譯には往かぬ。何とか處置を取らなければならない。此の時、わしはふとその昔無著尼のよんだ歌を考へた。

千代能がいただく桶の底拔けて、
水たまらねば月も宿らず。

其の歌の心に思ひ及ぶと、わしは心機一轉した。

「宜しいッ、無から無のつけわたりで、『電光影裡に春

風を斬る、『やつつけろ。』

と決心して、褞袍の内懷を探つて、泰然として彼等が急ぐに任せて居た。

夜は靜かに更けて、峠の空にも春の夜の月が浮かんだ。樹立の茂み、懸崖の肌は黑く、薄々と照る月の光も、其の夜は趣あるものとは思はれなかつた。「峠の上で……あれを持つて來た」といふ言葉の意味は、峠の上で、わしを殺す兇器を持つて來たとの事である。併しわしはこの通り體も大きいし、武人である處から、彼等にも油斷はない。十分首尾宜くやる意で、腕節の强い兇漢が揃つて、やつて來たらしい。

瞼

簀の子

間一髪

「汝……いまに見ろ。」

と寢て居る筈のわしは、短銃をぴつたり握つた儘、態と瞼を閉ぢて居た。

彌ぐ坂路を登り詰めて峠へ出た。山口峠の絶頂はどんな處か。

斜に伸びた山路の脇の僅かの平地に、一軒の茶店がある。茶を汲む人は麓へ降つて、破れた簀の子を淋しく風が掠めて吹く。彼等は一方の崖際に、靜かに駕籠を搔き据ゑた。瞬間に

「こらッ。」

と怒聲一番、横飛に駕籠の中から躍出す間一髪。駕

狼狽ふ

籠舁の一人が拔身を、ぐさつと、駕籠の外から突込んだ。今一人の奴は狼狽へて、駕籠の柱へ斬付けた。此の時早く、わしは仁王立ちに突立つて、一發どんと打放した。兇漢どもがたじろく間に、わしは後の高地へ驅け登りさま、短銃を差向けて

「さあ來い、幾人でもやつて來い。不埒な奴だッ。」

とど鳴りつけた。實際その頃は血氣盛り、短銃は擊ち馴れてゐたから、三人や五人を向うへ廻しても、やつつける意であつた。併しさうなると弱いもので、唐突に短銃を向けられて、酷く面食つたものか、四人の奴等は、二人宛、右と左へ、飛ぶが如くに籠を指して

罠

逃げ失せた。拔刀を提げて居たのは、確に二人であつたと覺えて居る。兇漢どもの罠は斯うして逃れたが、若しあの時、今少し寢込んで居たら、わしはあの峠で、串刺にやられたに違ない。それはよいが、困つた事には、駕籠舁を追散らしたので、淋しい峠には、空駕籠とわし一人が取殘されてしまつた。此から山口驛まで降るには、彼等の逃げて行つた山腹の嶮路を辿らねばならぬ。若し途中で彼等から惡戲されては困ると思つたが、併し何時までかうして居る譯にはゆかぬから、わしは襠袍の上に、軍刀や鞄を十文字に紐をかけて脊負ひ、毛布を冠り、右手に短銃を握

つて、辨慶が七つ道具を脊負つたやうな妙な態で、のそのそと山路を降り始めた。

此の途すがら、彼の北條早雲が鈴鹿山で賊に逢うた時、

「緑林の強賊却て廉直、奪はず關東大八州。」

と詠じたとか云ふ昔話を思出したが、扨實際自分がその境遇になつて見れば、なか〳〵そんな譯にはゆかぬ。荷物は重し、種々のものを脊負つて、ピストルを握つて歩く姿は、決して氣の利いたものではなかつた。

麓近く來かゝつた時、又こんな事を思出した。山

姥の謡曲の「佛も有れば衆生もある、衆生もあれば、山姥もある。」と丁度同じ道理で、世の中には善人もあれば悪人もある。悪魔も天帝も共に見てゐるのだから、如何なる危急な場合にも、油斷さへなければ、危難を免れる事は出來るものと熟〻考へた。不用心から、危く彼等に殺されようとしたわしは、何の爲に和歌山へ夜をかけて往くのか。やつぱり人を殺す爲の兵隊を募りに行くのだ。人界の事と云ふものは、眞に面白いものである。こんな事が禪の所謂「柳は緑花は紅、」とでも云ふのであらう。

其から白々明けに山口の驛に着いて、和歌山へ急

ぎ、豫定の任務を遂行したのであつた。

（岡本柳之助）

七　繪葉書だより

田舍の友より

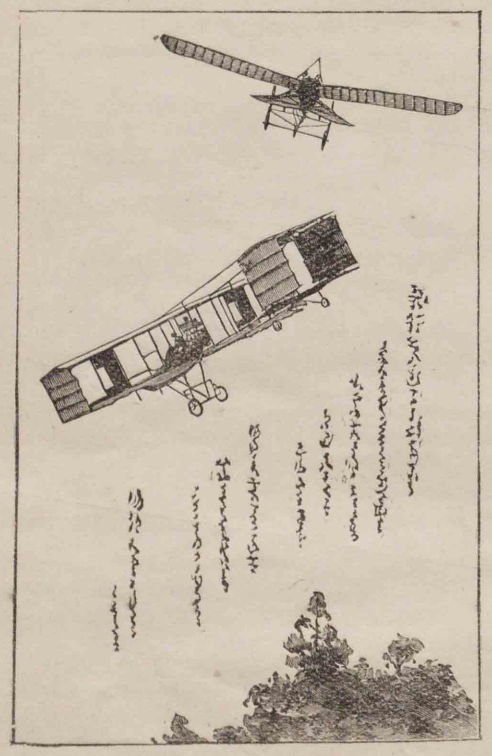
起き伏せる丘、丘の上なる若木の松林、林の下は一面の薄、火をつけたらんが如し。雜木の黄葉、花よりも麗し。夕の雲のたゝずまひ、わが拙き水彩にそ

たゝずまひ
水彩（三）

の萬分一をあらはせど、秋の景色の眼睛ともいふべき百舌鳥の鋭き鳴く音は、到底畫中に入るべからず。

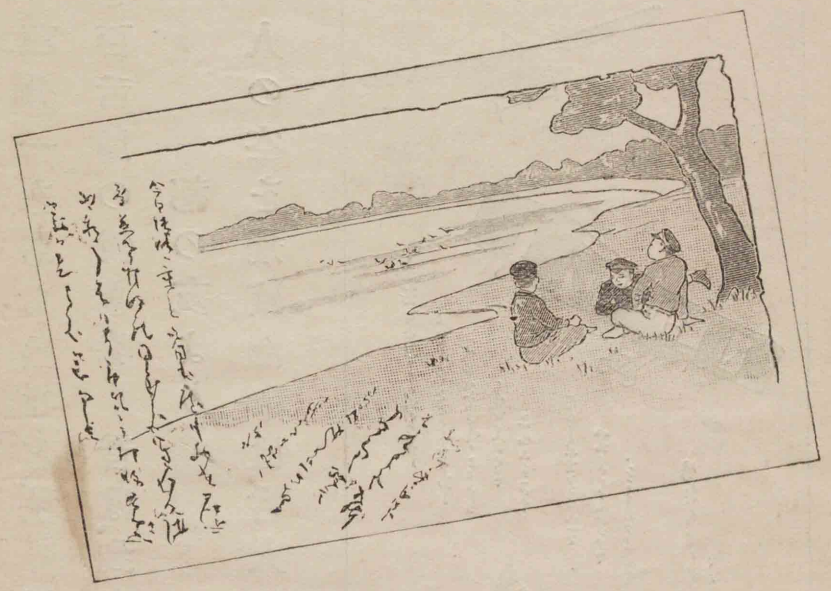
都の友より

人の空を飛ばん事は、古人の夢のみにも非ざりけるよ。見給へ、下なるは雄姿堂々、大鵬の翼を張りたらんが如し。フアールマン式よ。上なるは輕快、



大鵬

翔（羽）る
爽（爻）快



隼、鷹の翔るに似たり。
*ブレリオ式なり。
所澤の空なる*プロペラの爽快なるうなりは、そぞろにわが智識上の功名心をそゝる。

田舍の友だちより

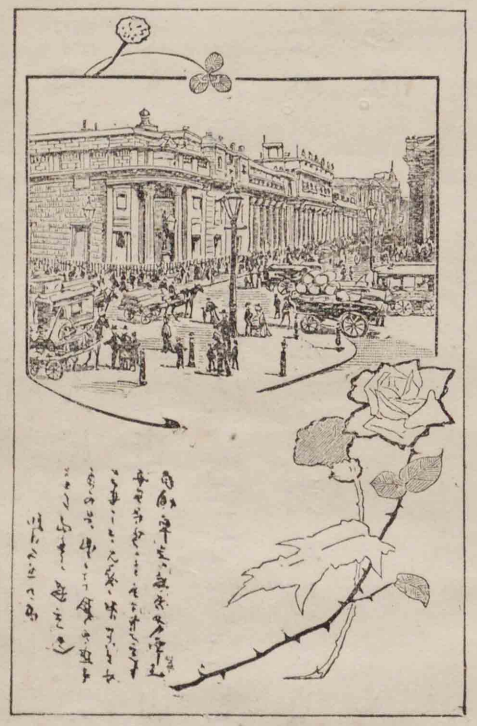
今日快晴に乘じてわれ等五人此處に散策す。　甲某

鳰

翅（羽）

沼上風なく波なく、鳰の群、水面をうつて東に飛ぶ。　乙某

柿をかじりつゝ、甲君例の氣を吐くことしきりなり。　丙某



翅弱げに飛ぶ死殘りの蝶に感じて、乙君今苦吟最中なり。　丁某

遙に君が健康を祝す。　戊某

都の友より

大厦
雜沓（水）
熱鬧圈

自動車走り、電車行き、馬車馳す。十幾層の大厦は軒を並べ、幾万の人は左往右往、東奔西走す。いふまでもなく世界最雜沓の街路なり。

活動、活動、活動は都會の花にして、又文明人の生命なり。吾人の將來の天地は、まさにこの熱鬧圈中にあり。

八　アブラハム、リンカーンの少年時代一

完全無缺の人物は、古往今來、決してありません。しかし、完全に近い人物を求めたならば、アブラハム、リンカーンの如きは、實にその一人でありませう。

稀有
追慕

英雄・豪傑は必ずしも得難くはありませんが、完全に近い人物は、眞に稀有のものであります。

リンカーンは、北米合衆國第十六代の大統領であります。智あり、勇あり、義あり、愛あり、その德は萬世に輝き、その澤は四海に溢るゝ人であります。私は今此の大人物の少年時代の話をして、聊か、追慕の意を表したいと思ひます。

斯かる大人物も、其の生れは極めて賤しく、生れた處すら、唯ケンタッキー州中の、當時ハルデンと稱へられた片田舍のノールン河の邊といふだけで、今日は遺跡とても殘りません。彼の兩親は極めて貧し

く、家と稱するほどの住居もなく、丸木の小屋に住んで居りました。この丸木小屋こそ、實に、千古の大人物アブラハム、リンカーンが、呱々の聲を擧げた處であります。時は西暦一千八百九年二月十二日、春雪正にとけて、梅花綻ぶる時節の事であります。

父は憐むべき日雇で、日々他人の田圃に勞役し、母は炊事・裁縫一切の家事を勤むる外に、他家に洗濯に雇はれたり、近傍の森や林に薪を拾うたりして、其の日其の日のかすかな煙を立てて居りました。リンカーンは、七歳の時から、父に隨つて森に行つては、小さい腕に小さい斧を揮つて、開墾の業を助け、畠へ出

呱々

開墾

ては、鍬を執つて耕作の手助をもして、十年餘り、寸毫の暇もなく、營々として勞働を續けました。

斯かる貧苦の間にも、常に彼を教へ彼を勵まして他日大成の基を作つてくれた人がありました。それは誰でもありません、彼の母親でありました。この母親は、素性は賤しかつたが、至つて賢明な婦人で、常に、人間の價値は、その身の富貴・貧賤によつて定まるものでなく、その精神の如何によるものであることを教へました。そして、「卿を學校に入れて、學問をさせたいは山々であるが、今の貧乏では、それもかなはぬ。せめては、母が覺えた一通りを教へるほどに、

農事の暇には、精出して勉強せよ。」と懇ろに言ひきかせて、第一に習字、次ぎに讀方を教へ、朝は早く起して

脆し

は習はせ、夜は疲勞を忍ばせては教へましたが、不幸にも、リンカーンが十歳の時、朝露に先だつて、脆くもあへなくなりました。彼は天を仰ぎ地に俯して歎き悲しみましたが、今は致方もないので、

父と泣く〳〵野邊の送りを營みました。

父はもとより、日々の勞役に追はれて、その子を顧みる暇はありません。母亡き後のリンカーンは、暗

赤貧

播く

夜に燈火を失つた心地。「せめて一年半年なりとも小學校に通ひたい。」と切りに父に訴へましたので、父も餘りの不便さに、遂に之を許しました。リンカーンは、天にも昇る心地で、日々九英里餘りの路をも厭はず、一回の缺席もしないで、田舍の或小學校に通ひましたが、哀にも赤貧の爲に、僅々九ヶ月にして、復、廢學せねばならぬ事になりました。あゝ、この九ヶ月こそ、彼が前にも後にも、一生涯中に受けた學校教育の全體であります。

これより、彼は日々鍬を執つて、田圃に働く身となりましたが、或は種を播き、或は草を刈る傍には、毎に

二三の書卷の横たはるを見るのでありました。その書は、綴字書・算術書・文法書の三種でありました。

彼の性の怜悧なる、又その精神の不屈なる、耕作の暇暇に、露天の下で、教師もなくて、よく其の意義を解くことを得ました。　斯くて、朝には此等の書を携へて出で、夕には之を携へて歸り、暇ある毎に怠らなかつた爲に、久しからずして、三書の一章一句も、殘さず悉く諳記するに至りました。

怜悧
露天

九　アブラハム、リンカーンの少年時代　二

十三四歳の頃、彼は隣家に、かねてその名を聞いて

その功業を敬慕せるジョージウオシントンの傳記を藏することを知り、欲しいとは思ひながら、賤しい身分を恥ぢて、思をこがしてゐました。　一日、遂に思ひ切つて、その借覽を請ひました。　處が幸に、其の人は快く貸してくれました。　リンカーンは鬼の首でも取つた心地で、雀躍して家にかへり、折角苦心して借り得たものと思ひ、丁寧に戸棚の中に入れて置きましたが、不幸にもその夜大風雨があつて、彼が爲に一大事が起りました。　彼が驚き覺めて、借りた本の事を思ひ出し、濡らしては一大事と、急ぎ取出して見た時は、もう後の祭。　壁の隙間から吹込んだ雨に濡

雀躍
後の祭

れて、さんざんになつてゐますので、大聲あげて泣きました。小兒心に心配して、其の夜は終夜眠られません。翌朝、兎や角と案じましたが、正直に次第を述べて、罪を謝する外はないと決心して、濡れ破れてページもわからぬ書を捧げて隣家に行き、泣いてわびをし、「其のかはりに二日でも三日でも、勞役をさして下さい。」と賴みましたので、貸主もその心を察して、別段にこれを尤めず、その意に任せました。そこで、彼はウオシントン傳を携へて家に歸り、濡れたページを分け、丁寧に乾かして、晝夜の別なく耽讀しました。以來、熟讀數十遍、この大人物の品性・事業に感化せら

耽讀

れて、遂には彼を體得するに至りました。

又、彼が一農家の僕となつて居た頃、或日、一人の旅客がその家に泊つたことがあります。深更に厠に行つて、ふと、庭の木立を洩れてさし來る燈火の光を見つけました。はて不思議と、竊に行つて見れば、思ひがけなくも、裏の粗末な長家に、一人の少年が一心不亂に書見をして居ります。旅客はこの意外の光景に、ひどく驚いたが、その夜はそのまゝわが室にかへり、翌朝、家の主人にこの事を聞きました所が、主人も「彼は感心な少年で、晝間は畑に出て、寸暇を得れば書を讀み、夜も夜業が終れば、更くるまで勉强し、わか

體得

更く

謙遜

らぬ事があれば、人に質して、學問を此の上なき樂しみとする、溫順しい、謙遜な、そして正直によく働く、才智もあれば、情愛もある、まことに末賴もしい少年である。」と答へたといふ事であります。この少年こそ、言ふまでもなくリンカーンその人でありました。

諸君は、我が國近世の偉人、二宮尊德の少年時代の勉學を知つて居られませう。貧家に育つても、よく勉强の功を積んで、大成せる東西の二大人物の少年時代は、實に私共の模範とすべきものであります。艱難汝を玉にす。リンカーンが他日大統領となり、世界の大人物として、萬人に仰がるゝに至つたのも、

實に此の少年時代、貧窮の經驗から得た教訓の賜であると思はれます。

（阿ブラハム倫コルンに據る）

一〇　アルベール皇帝

記憶すべき八月二日は來た。

獨軍をして無事に白耳義の領土を通過せしむるや否やといふ獨逸政府の手詰の最後通牒に接して、二日の夜から三日の朝にかけて開かれた白耳義內閣の御前會議の席上で、何人よりも先に、決然として、獨逸の無法なる要求を拒絕すべき事を說かれたのは、アルベール第一世皇帝であつた。「軍事上如何な

らん利益の關係あらんとも、これを以て他の權利を破壞すべき理由とするに足らず。」これが白耳義の獨逸に與へた回答であつた。一語凛として人の耳を劈くものがある。「軍事上の利害の關係」といふのは、獨逸が片時も早く佛蘭西に討入るには、是非とも白耳義を通過して行く必要があるといふのを指すのである。「權利の破壞」といふのは、獨逸の得手勝手で白耳義の永世中立の權利を蹂躙することをいふのである。アルベール皇帝は實に言ふべきだけのことをよく言はれた。而して、更に之に加ふるに、「當國政府は其の力の堪ふる一切の手段を盡くして、其の

劈く

權利の一切の侵害を擊滅せんことに、堅く其の意を決したり。」の語を以てした。威風堂々たる外交文書の絶唱、百世の下に懦夫をして起たしむるに足るものがある。

絶唱

八月四日、獨逸は更に此の抗議に答へて、其の主張を繰返した。此の時は、獨逸軍が早白耳義に押入つて、ヴイゼの橋の上で兩國の軍が砲火を交へた時であつた。此の日此の時、アルベール皇帝は肥馬に鞭うつて、ブリュッセル*の町を議會へと急がれた。例によつて勳章一つ附けぬ身輕の戰時服に身を固めて、殘る所なく出陣の用意をして行かれた。路の兩

颯爽

側の群集は、此の颯爽たる英姿を見上げて、思はず歡呼の聲を揚げた。議會に於ける皇帝の演說は、簡單ではあつたが、要を得たものであつた。「念とすべきもの唯一つ、曰く愛國心、慮るべきもの唯一つ、曰く我が國獨立の脅威、務とすべきもの唯一つ、曰く頑强なる抵抗。」「此の危機に際して要する所の德二つ、一つには冷靜にし堅固なる勇氣、二つには白耳義全國民の一致。」「朕は信ず、自ら護る國は死せず。」と、これがその主眼であつた。

先づ文書の上で獨逸の鼻柱を挫いて置いて、次ぎに彼の有名なリエージの要塞戰で、力の上で再び彼

阻止

の鼻を折つた。戰は結局白耳義の敗となつたが、此のリエージやアンウエルスで、兎にも角にも一時獨逸軍の前進を阻止した爲、獨逸軍は終に巴里にも入れず、カレーにも行けず、爲に佛蘭西も助かれば、英吉利も救はれた。白耳義の態度に誰一人痛快を感ぜぬもののないと共に、又誰一人此の國が國命を賭して正義の爲に戰つたのを壯としないものもない。これが先帝レオポルドの時代であつたら、とてもかかる快擧に出づることはあるまいと思ふと、自らアルベール皇帝に對する敬愛の念が涌いて來る。嗚呼アルベール皇帝よと、當時知るも知らぬも皆手を

塹壕

啜る

拍つて感歎の叫を揚げた。

民を愛すること子の如く、即位以來施政の第一方針を下層の民の幸福に置かれた皇帝は、戰に臨んでは、其の兵を愛すること最も深かつた。質素な軍服を着けて、兵士と同じやうに塹壕の中にも入れば、鐵砲も擊たれた。戰線を巡視される時などは、引き繕つた樣もなく、打解けて兵士等と世間話などをなされ、時には彼等の中に立交つて、スープを啜らるゝことすらあつた。また、其の自動車に兵士等に宛てた郵便物を滿載して、行く〳〵夫々に屆けさせられることもあつたので、皇帝の戰線巡視は一同の待ちかねる所であつたといふ。

君君たり、臣臣たり、白耳義三十萬の兵、皇帝を慕ふこと父の如く、此の君の爲とならば、水火も辭せずと勇み勵んだのも、固より當に然るべき所であつた。

（杉村楚人冠）

一一　思出

雪を釀す寒空、がさと風に鳴る井戸端の枯ずゞだま、何處を見ても冬枯の澁面作つて、今にも泣出しさうな景色であつた。

家を出て二三十歩行くと、金滿家の子の勇次とい

ふ色の生白い兒が、突然「二けん三げん、しけんに負けて、落第坊主。」と囃し立てる。　打ちのめしてやりたかつたが、母がぢつと睨むので、默つてついて行く。　すると、今度は矢張り遊び仲間の勘次郎といふ半面痣の出來た兒が、「やあ愼ちやん、紋附着て何處へ行くだ。先生に斷りに行くだかね。」といふ。　僕は顏を眞赤にして、矢張り默つて母の後について行く。

痣

雪意を催す櫟

母も無言、僕も無言、蕭條と雪意を催して來た田の中道を横ぎつて、次第に櫟の茂つた丘の方に近づいた。　さては墓參をするのだなと思つた。　此の丘の後に先祖代々の墳墓がある。　併し其にしては花も持たず、線香も持たず、如何するのであらうと疑つたが、母は矢張り無言で、ずん〳〵　落葉に埋んだ小路を山へ〳〵と上つて行くから、僕も無言で從つた。

蓊然

丘を越えると、柏杉などの蓊然と茂つた小山があつて、小山の半腹は二反ばかり拓かれて、此處は特に我が菊地家の菩提所になつて居る。　四方は小高く石垣を築上げて、上には平石の間々に小石を敷きつめ、苔だらけの五輪塔や、定紋の桔梗を彫つた石碑が其處此處に立つて居る。　すばらしい老松が一本、櫻の大木が一本、左右から墓地を蔽うて居るが、今は十二月の末だから、櫻は裸で、小石の間は一面に松の落

菩提所

葉が埋めて居る。　此の秋父の柩を送つて此處に來た時は、櫻の葉が紅くなつて、ぱら〳〵落ちて居たが、今はもう葉のかげもない。　觀音篠がかさ〳〵鳴るばかり、鳥も歌はず、人も來ず、淋しい事である。

母は墓地の入口で下駄をぬいで、つゝと後も見ず上つて行くので、僕も草履をぬいでついて行く。　母は父の墓――まだ木標のまゝだ――の前に來ると、膝を折つて石の上に坐つた。　暫くは無言である。

「愼太郎」

僕は顏を上げた。　母は何時の間にか、黑鞘の懷劍を左手に握つて居る。

「お前は何歳になるかい。」

僕は頭を垂れた。

「彼程お母さんが不斷言つて聞かしたのが、お前の耳には入らぬのかい。　お母さんはね、唯菊地の家が興したいばかりに、難儀苦勞もしてゐます。　其の心盡くしが、如何に子供でも、お前にはわからぬかい。お父樣はこんなになつておしまひなさる。　家屋敷は人のものになる。　義理にも生きては居られないのに、斯うして恥づかしい目を忍んで居るのも、たつた一人のお前を育て上げて、潰れた家を立て直して、『あゝ菊地の家がまた興つた。』と村の者にもいはれた

いばかりぢやないか。それに今度のお前の狀は何事です。水飲百姓の子供と遊び暮らして、友達からは落第坊主とはやされる樣になつて、それで一生腐つてしまふ積りかい。菊地の家を潰した上にまた潰して、其でよいと思ふかい。口惜しいとは思はぬか。慎太郎、何故默つて居る。えゝ口惜しい。今日が今日まで身を削つてもお前を育てよう、一廉の人間にしようと思つて居たに——最早諦めた。お前を殺してわたしも死ぬから、さう思ひなさい。其とも口惜しいと思ふか、思はぬか。慎太郎、さあお死に、此の短刀でお死に。卑怯者、さあ死なぬか。」

黑塗の鞘を拂つて、氷の如き懷劍を突付け、突付け、母は僕に詰め寄つた。あゝ、此の時の母の顏、きと僕を睨んだ眼光、二十餘年を經て、今眼の前に歷々と見える。何處に居ても、氣が挫ける時、一點不良の念の萠す時、此の一双の眼は、突如爛然と吾を睨むのである。

睨む　爛然

僕の額からは、大粒の汗がぽろ〳〵と滴り落ちた。皮膚は水を浴びた樣に、腹の內は熱鐵を飲んだ樣に、耳は鳴り、眼は眩いて、心臟は早鐘を撞き鳴らす樣に鼓動する。もう母の顏も見えぬ、言葉も聞えぬ。夢中に懷劍の柄を攫んだかと思ふと、母はいきなりギバもギ

とつて、二間あまり投げ棄てた。

「卑怯者」

ぶる〳〵と震へて、僕は拳を握つた。だしぬけに涙がほろり。と思ふと、僕は嗚咽して哭き出した。悔やしいのか、嬉しいのか、哀しいのか、恥づかしいのか、辛いのか、恐らく其のすべてであらう。身も心も溶くるばかり、大泣きに泣いて、もう僕は此の儘此の墓場の露と消えてしまふかと思ふほど存分に泣いた。二十分後は、もう香爐に溜つた雨水で顔を洗つて、母と一緒に祖先の墓や、父の墓の前に跪いて、未だ嗚咽をしながらしんみりと何事をか念じた。

鬼子母神

畔に入る

空田

雪がちら〳〵と降り出した。母は懐劍を帶の間に藏めて、僕の手を引いて墓門を出たが、二人とも何も言はぬ。

墓場を出て少し行くと、大きな椎の樹の下に小さな鬼子母神の祠がある。少し休んで行かうと、母は祠堂に腰をかけた。此處は小山の角で、見晴らしがよい。谷の三分二は先づ一畔に入る。町は固より學校も見える。谷を流るゝ二條の川も見える。城下へ通ふ往還も見える。幾千頃の空田に寒鴉の下りるのも見える。故郷の風物は蕭條として、一種悲寥の面影を吾等母子の眼前に展べて居る。雪は間

も無う小降りになつて、たまにさらく觀音篠にさやいた。

母は僕の手を握りながら、種々と話した。祖先の事、祖父様の事、彼處に見ゆる赤黑い杉の森は、大水の出ぬやうに曾祖父様が植ゑたので、彼の川堤は、祖父様が自費で村の爲に築いたので、彼の鳶の飛んで行く邊の山は、一つも殘らず家の有であつたので、彼の傘をさして人の行く畦路の邊から此方の田は、何十町といふもの、皆家の有であつたので、彼の學校も、と僕の父が地面を寄附して建つたのであり、昔は菊地といへば、此の谷に並ぶ者も無い大家で、代々眞直な道を履んで、村の爲に計つて、殿様から褒美を受けた者もあれば、自ら名のり出て、村の者の罪を庇つた者もあるといふことを、諄々として話した。

耳は過去の榮華を聽いて、眼は今の零落を見るといふのは、僕の當時の身の上であつた。つくづくと母の物語を聞いて、さて今は他人の有になつて居る其の山や、其の田や、其の家を見て居る内に、眼は次第に曇つて、涙がまた新に湧いて來た。而して僕の胸中には幼いながらも、一つの志望がしつかりと根をおろしたのである。

とにかく犬死すまいと思ふ一念の燃立つたのは、

實に此の時で、言ふまでも無く、此は母の至誠の烈火のやきこまれたのである。あゝ、若し母が居なかつたら、僕は如何なつたであらう。

（徳富健次郎）

一二　母の手紙

そもじ

一筆申入候。去る八日附けの手紙、死したる者の便りにても聞く樣に、嬉しく悲しく披見いたし候。さて、昨年の暮そもじ志を立てて、東京にて苦學する旨書き殘して家を出でられ候以來、今日は安著の便りあらんか、明日は手紙の著かんかと指を折りて相待ち候へども、何時までたちても何の便り

心もとなし

も無く、餘りの事に御地の中島樣に問合はせ候處、少しも御存じ無き由返事參り、なほそもじのかねがね心易くせられし松村氏へも尋ねやり候へども、彼方にても思ひがけぬ由にて、實に何處をあてに尋ねん術も無く、餘りの心もとなさに愚とは知りながら、巫・易者にまで相談致候へども、取りとめぬ事ばかりなれば、今は運を天に任する外なしと諦めても、夜はそもじの病氣にて道側に倒れ臥されし夢を見、晝は人の足音、郵便と呼ぶ聲に胸を轟かし、實に骨を殺がるゝ思にて日々相暮らし居り候處、天道人を憐み給ひて、思掛なく七月ぶりにて

そもじの手紙相とどき、やう〳〵胸撫でおろし參らせ候。　そもじにも昨年このかたさまざまの苦勞如何ばかりと存じ參らせ候。　併し西内様・兼頭様とやら、人々の御親切に御世話下され、兎も角も、人様の御厄介にもならず勉強なされ候事、いかばかりか嬉しう存じ參らせ候。　過ぎにし事は最早何とも申すまじく候。　此の上ながら萬事に心をつけ身體を大切にし、志をふり立てて御出精の程祈り參らせ候。　申すまでも無く候へども、そもじは菊地家再興の重荷を負へる大事の身に候へば、よく〳〵思案し、菊地家の家名を損ずる様の事無

出精

き様、くれぐれも心つけられたく、母が世の中の望とては、唯そもじの立身出世一つに候へば、此の上ながら勉勵頼み入り候。

そもじも不幸なる時に生れ合はせ、何かにつけて思はしからぬ事のみ多く、齒痒く辛く思ふことも定めて多かるべく候へども、何を申しても女の痩腕一つなれば、身の皮を剝いでも、そもじの一月の學資だに思ふに任せぬ母が心の切なさを酌みたまはば、艱難貧苦にめげず、屈せず、名を揚げ、家を興しし古の名ある人々を手本とし、身に襤褸を纏ひても、心の操をつゆ汚さず、此の上の勉強頼み入り

候。申したき事は山々候へども一時には書き盡くし難く、一先づこれにて筆止め參らせ候。めでたくかしく。

七月十四日　母より

慎太郎どのへ

尙、別紙一通は兼頭様へ、一通は西内様へそもじ持參しくれぐれも御禮申し述べらるべく候。わが勞に誇ることなく、人の恩を忘るゝことなきは、人につきあふ第一の心得にて候。

母も近頃は表書の所に移り、近所の娘・子供達に手習やら裁縫やら教へなどして暮らし居り候。皆々親切になし下され、少しも不自由なく候まゝ、必ず必ず氣に懸けらるまじく候。

着物嘸々不自由なさるべく察し入り候。唯今單衣仕立て居り候間、出來次第送るべく候。

かへすがへすも病氣せぬ様念じ入り候。

（徳富健次郎）

一三　ローレライの巖

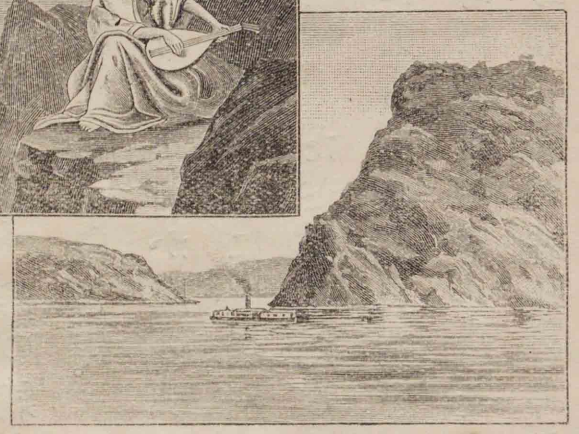
オバーウエゼル*を過ぎると、川は大屈曲をなして、一大奇勝を形作り、夢寐にもあこがれたローレライの巖は、眼前に現れた。萊因*に遊ぶ者で、此の巖を見

嶮峭

ずして歸る事があれば、家人は其の人を家に入れないとまで云はれてゐるのがこれである。灰色の嶮峭な巖山が、河の東岸に聳えてゐるのを見上げて、船客みな「ローレライの巖だ。」と口々にいふ。

昔、日くれて、蒼白い月影が萊因の流を照らした折、此の巖頭に、夢のやうな柔かな歌の聲が聞えて、やがて現るる神女の美しさ。行きかふ船人が、心もそらに其の姿に見とれてゐる間に、あだ浪忽ち起つて、その船を沈めてしまふ。斯くて何人も、此の神女に近づくことが出來なかつた。そして夜毎々々柔かな低い歌聲は、斷續して霧立ちこめた曉に及んだ。

究竟(立)　**黄昏(日)**　**沍ゆ**



此の地方のさる大名の若殿に、ローナルドといふ勇士があつた。此の噂をつたへ聞いて、ある日狩獵に託して、究竟なる老船頭を雇ひ、輕舟に乘じて此の巖へと向つた。黄昏いつしか谷を包んで、日は彼方の山の端に沈み、靜かな夜の色の中に、空の星影の沍え渡るとき、舟は此の巖下に漕ぎつけられた。彼は瞬もせず巖上を見

飄る

囁く

つめてゐる。「ローレライ、神女の姿。」とさゝやく低いじた神女の影。其の氣高さ、其の美しさ、丈にも餘る金髪、風に飄る白き袴。

一目見たわか殿の魂は、忽ち其の身を離れてしまつた。彼の前には巖壁も無ければ、彼の下には流水も無い。ただ沈々たる月夜は、おぼろに霞んで、彼の目に入るものは、只笑を含める神女の姿である。彼の耳に聞えるものは、その名を囁くやうな神女の聲である。忽ち若殿の叫聲は巖に響いて、その姿は激流に消えて、行方も知れずなつた。

此の時雲間を破つて閃く電光、耳をつん裂く雷鳴に、老船頭は少時茫然として自失したが、漸く我に歸れば、天は忽ち晴れて、巖が根に打寄する浪の音に、ローレライの歌聲が響きあつて居た。

此の報を得た父君の驚愕・悲歎・憤怒は、譬ふるにものもなかつた。嚴命一下、勇敢な青年數人は、直ちに派遣せられた。早船は矢の如く萊因の流を下つて此のローレライの巖へと近づいた。巨人の如く立てる斷巖が、刻々に暮色に包まれ去る時、一隊は勇を鼓して登り行く。巖頭に映ずる夕陽の影かと見たのは、常の如く金髪を風にそよがせて姿を現せる神

女の光明であつた。

神女はやがて、胸なる眞珠の鎖を解いて、其の額に捲き、一隊の勇士を嘲るが如く一瞥した。「地上の弱き青年等よ、卿等はこゝに何を求めんとて來れるか。」と神女の唇は動く。「汝惡魔よ、われ等は汝を水底に突きおとさんがために來る。」と隊長は怒の聲高く叫びつゝ、どつと笑へば、反響は山のあなたに又どつと笑ふ。

「嗚呼、萊因の河は、今わらはを召す。」と神女は巖頭に立上り、谷底を望みつゝ、眞珠を執つて水中に投げすて、低い清らかな調で歌ふ。

みまし

懷かしき父上よ、急ぎ給へ、萊因の清き流より
急ぎて駿馬を送りたまへ。
浪よ立て、風よ吹け、此の立つ浪と吹く風と、
わらはは、みましの許に行かん。

歌終れば、一陣の暴風起つて、川浪にはかに岸を覆ひ、二條の波濤、雪より白き駿馬の如く、水底より立上るよと見る間に、神女を包んで激流の中に沒してしまつた。

この時から、ローレライの神女は、絶えて其の美はしい姿を現さない。只夜色沈々として、蒼白き月影が深緑の水面を照らすとき、此の巖下を過ぐる舟人

は、幽かな調で歌ふやうな聲を聞くといふ事である。

嗚呼、ローレライの神女は、この地を去つてしまつたが、詩人に歌はれ、名畫に描かれて、世界の人の胸に今も殘つて居る。　天下の好山水は、必ずしも萊因に限らないが、この神話に依つて、その山水の風光は、永く人の感歎を深うして居る。

神話

一四　爾靈山攻撃　一

今や第三回總攻撃が開始される事となつた。　而してその事實にあらはれた第一の計畫は、松樹山砲臺を突破り、旅順要塞を兩斷する目的を以て行はれた白襷隊の突撃である。　この突撃は二十六日の夜半に、海鼠山の麓から、松樹山の豫備砲臺に向つて行はれたが、一隊殆ど全滅し、累々たる死屍を遺して退却するの已むを得ざるに至つた。　そこで第二の計畫たる爾靈山の攻撃となつたのである。　蓋し爾靈山は、旅順口内の全部が視通される重要な位置で、これが我が軍の手に入つたならば、其の他の堡壘は、とても支へる事の出來ない程の要害である。

部署

是よりさき、攻撃部署が定められて、爾靈山の攻撃には、後備旅團と我が歩兵第一聯隊とが當る事になつて居た。　二十七日午前十一時、聯隊本部は、海鼠山

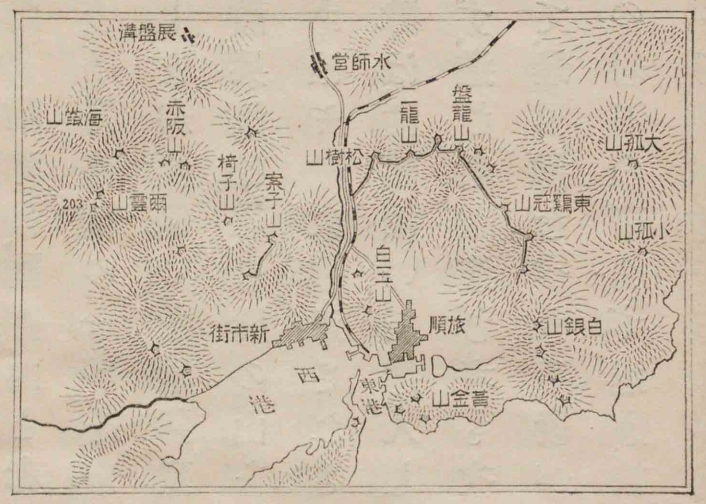
對濠作業

火燄

の頂に移り、砲撃の結果を視察すると共に、爾靈山に向ふ對濠作業を進める事になつた。　二十七日午後一時頃から、展盤溝に据ゑつけてあつた我が二十八珊榴彈砲は、爾靈山と赤阪山とに向つて、砲撃を始めた。　海鼠山と爾靈山との距離は、約五百米突、赤阪山とは僅か二三百米突であるから、その破裂の光景は、手にとるやうに見える。　巨彈が轟々と空を切つて飛ぶ音、黑線を描いて敵壘に落ちるさま、それが爆發して倒圓錐形の火燄を噴き、岩石を飛ばし、敵兵を空高く吹上げるすさまじさ、言語に盡くされぬとは、この光景であらう。　午後二時、わが聯隊は今夜六時を

活劇

征衣



期して、爾靈山及び赤阪山を攻撃すべき旅團命令に接した。　そこで、第三大隊は爾靈山の攻撃に當り、第二大隊は赤阪山に向ひ、聯隊豫備としては、第一大隊を殘すことに配置がきまつて、愈、驚天動地の大活劇が始まらうとして居る。

時は北風そら寒く征衣を吹いて、黃昏の色漸く天地をこめ始めた十一月二

十七日の午後六時。正に所定の突擊時機は來た。兩突擊隊は、爾靈山と赤阪山に向つて、一擧に山を攀上り、鐵條網の一部を破つて、そこから突進しようとしたが、兩側の敵は、猛烈な射擊を浴びせかけるので、散兵濠は忽ち屍の山を築いて、折角占領した陣地も、あはや敵に取返されさうである。　これを見た豫備隊は、猛然續いて進入したが、敵の射擊は少しも衰へず、進む者も進む者も、次ぎ〳〵に斃れ、幹部が全滅して、最早進むべき手段がないので、攻擊隊は鐵條網下の岩石の下まで退き、攻擊準備陣地を作つて、こゝに潜み、聯隊本部は、爾靈山の麓に進んで夜明を待つた。

あはや

明くれば二十八日、天は陰晴定まりなく、强風沙烟を吹きまくり、寒暖計は攝氏零下八度を示して居る。早朝から副官は赤阪山に、聯隊長は爾靈山に、各〻戰況視察に出かけられるので、自分は副官代理として、聯隊長に隨つて出た。　時は午前八時、聯隊長は愈〻突擊の決心をして、「軍旗を捧持して來い。」といはれるので、早速立歸つて軍旗を捧げ、從卒と僅かの旗護兵とを隨へて、聯隊長の後を追うて急いだが、此の時聯隊長は、はや突擊陣地を乘越え、二三俵積上げた土囊の陰に身を寄せ、軍刀を拔いて「旗手」「旗手」と呼んで居られる。　其の聲が何時もに似ず低いので、驚いて馳付け

て見ると、機關銃彈が雨の如く落下する中に、隊長は重傷を負うて居られるのである。自分は旗護兵を踏臺にして其の背に乘り、聯隊長の襟を摑んで對濠内に引入れたが、隊長は見る〳〵顏の色蒼ざめ、傷口を眺めながら、

「成功を見ずに戰場を去るのが殘念だ。」

といふ言葉を殘して後送された。そこで、第一大隊長は、聯隊長代理となり、正午を期して再び突擊を行つたが、敵の小銃・機關銃丸は、雨霰の如く降りかゝつて、中腹に達しない中に、一隊悉く斃れてしまつた。

一五　爾靈山攻擊　二

あゝ、爾靈山は竟に落ちないのであらうか。併しながら、旅順口を落さうとすれば、爾靈山を奪はなければならぬ。一人たりとも人間のある限りは、爾靈山に向つて突擊せねばならぬ。

午後零時三十分、總突擊の命令の下に、高崎聯隊の一中隊は突擊した。彼等は伏屍をのりこえ、彈雨を潛つて突進し、山の中腹に潛んで居た我が第三大隊の生殘兵若干と協力し、雨の如き敵彈の下をくぐつて、幸にも敵の散兵濠に肉薄したが、胸壁は高くて攀

登る術もなく、辛うじて、その陰に身を寄せて彈を避けた。同時に、豫備隊たる第三中隊も、攻撃隊に加つた。午後五時、新來の第七師團第二十六聯隊の第一大隊は、我が聯隊長の指揮する所となつて、二箇中隊は爾靈山に、他の二箇中隊は赤阪山に增加せられた。新來の兵を得て、我が軍の士氣漸く振ひ、午後八時には、辛くも、山頂敵壘の左半部を占領するに至つた。

聯隊本部は、爾靈山頂に移された。併し、猛烈な逆襲があるに違ないから、警戒をさゝ怠なく、我が聯隊は防禦工事にかゝり、第二十六聯隊の兵は、到着したばかりであるから、中腹敵壘の線にあつて、敵襲に

備へて居る。果して「ウラー」「ウラー」の聲は物凄く起つて、あやめもわかぬ暗の中に、銃火閃々と輝き、見るまに死傷者が續々と出來て、幹部は聯隊長以下、將校一人も殘らず斃れたので、旅團は全く攻撃力を失ひ、一時攻撃を中止した。

あゝ、我が聯隊は、今や全滅に歸した。南山以來、幾回かの戰鬪に、忠勇なる我が將卒の血は、惜しげもなく半島の土に濺がれて、幾回かの補充兵も、次ぎから次ぎと死んでしまつた。かくて爾靈山攻撃は、遂に第七師團の擔任となつたのである。是から毎日毎夜、肉彈の投合ひを續けて、流石、頑强な敵も、とう〳〵

濺ぐ

肉彈

辟易した。十二月六日の朝七時は、實に六千萬同胞の記念すべき時である。爾靈山頂、仰ぐもなつかしい旭旗のひらめいたのはこの時である。（鐵血に據る）

一六　爾靈山

謹啓、二〇三高地の戰爭は、十一月廿七日より十二月六日に至る全九晝夜に亙り、敵味方五回取りて、五回取返され、遂に六回目に確實に占領せしものにこれあり候。その劇烈慘憺にして、一小地點に於て敵味方殆ど二萬の死傷を數ふるに至りたるは、上下五千載を通じて、東西の歷史に全く比類を

見ざる所にこれ有り、從つて其の間には如何に成行くならんかと氣遣ひたる節もこれ有り候ひき。戰爭後、同高地に登れば、落下せし彈丸は小石の如く、歩々靴のジヤリジヤリ音することにて、當時激戰の狀を御推察下されたく候。扨此の如き大記念の戰蹟なるに拘らず、全くの無名にて、海面よりの高さに依り單に二〇三と呼ぶは、少々物足らぬ樣人も我も考へ居り候。然ればとて、二〇三の名稱は既に世の人口に

膽炎

爾靈山嶮岩
雖攀
男子切名聞
克艱
鐵血霞山と
形改
萬人齊仰爾
靈山

也
玉斧　典　手を後

做す

も膽炎し來り候のみならず、「血に塗れて今や氣息絶えんとする兵士が、『二〇三はまだ取れませんか。』と問ひし所を見れば、二〇三の名稱は遂に捨て難し。」と岩村海軍參謀も申され候通り、二〇三の名稱は此のまゝ保存致したくと存居候折柄、唯今乃木大將より別紙の如き詩を送られ候。然る上は、大將の大功績の山にもこれあり候へば、爾靈山と呼做せば國音二〇三にも相通じ、最も恰好と存候に付、爾後日本國民は大將が名譽の記念として爾靈山と稱せんことを希望に堪へず候。匆々拜具。

（志賀重昂）

一七　北條時宗の膽勇

北條時宗は五代の幕府執權職であつた北條時頼の子である。時頼は執權職を退いて後、密に行脚僧に身を窶して、諸國の政治・人情を察したといふ有名な人である。時頼の歿した時には、鎌倉の諸將士を始として、諸國の守護に至るまで、悲慕慟哭して、薙髪するものが多かつたために、幕府は令を下して、之を止めたといふ程まで、敬慕された英雄である。此の

窶す

慟哭
薙髪

來冠

時賴の子である時宗は、父にも勝つた豪傑であつた。

時宗が始めて執權職になつた時は、十五歳の少年であつた。それから、文永十一年に蒙古國が最初襲來したのが、二十二歳の時、次いで弘安四年の戰役が三十四歳の時であつた。此の時の苦心經營は言ふまでもなく、文永の役の後には、彼の國の來冠を待たずに、我が國から敵國に攻入る計畫をも企て、弘安の役の後には、ますます西國の海岸防備を嚴重にして、永遠に國家を擁護した、其の功勞は、千歳の後まで語り傳ふべきものである。我が國の歷史に於ては、國の危い時には必ず忠義の英雄が顯れ出てゐる。蒙

拔山蓋世

古の襲來に當つては、實にわが英雄時宗が幕府執權の要職に居たのである。

三韓服屬時代以來、一度も外國との戰爭をした經驗を持たない太平の國民を率ゐて、蒙古・高麗の聯合大軍を引受けて戰うた時宗の膽勇は、實に拔山蓋世の英雄のそれといはねばならぬ。膽勇ある眞の英雄は、一方に冷靜なる判斷を以て大事に處すると共に、又一方に熱烈な心を以て事に當るものである。蒙古の來襲に當つて、時宗は我が指を刺し、流出づる血を以て大部の經文を書寫して、神佛に起請文を籠めて、戰勝を祈つたといふ。彼の師佛光禪師が、此の

宸襟

事をその語錄の中に、

一句と一偈、一字と一畫、悉く化して神兵となる。

猶天帝釋と阿修羅と戰ふが如けむ。我が國捷を獲て、魔軍降伏せむぞ。

と言うてゐる。

恐多いけれども、此の時朝廷に於ては、龜山天皇には深く宸襟を惱まさせ給ひ、伊勢大神宮に御祈あらせられて、御身を以て國難に代らん事を願はせられた事は、誰も承り知らぬ者はない話であるが、上には此の如き仁慈の天皇を戴き、幕府には膽甕の如き時宗を執權職とした我が國民が、身を忘れ家を忘れて國難に赴いたのは尤もの事である。

（上田萬年）

一八　金剛山

明治辛亥の初夏、五月の二十一日、かねてよりあこがれたる楠公の遺蹟を探らばやとて、南河内をさして出立つ。細雨蕭々たるしのゝめの空に、杜鵑折ふし若草山の木ずゑに啼くも、あはれ深し。

奈良より汽車に乘り、王子を經て御所に下車すれば、金剛山は威風堂々として眼前にそゝり立ち、自ら行客の意を壯ならしむ。勇み立つ足もと輕く、葛城川を渡りて名柄に向ふ。河原づたひに待宵の花し

げく咲きたり。

名柄の里に出づる頃、雨はいやまし烈しう降り出でたれど、なつかしの御跡訪はむのわが心には、身を知る雨のなかく〳〵にをかしく、井田・南郷・極樂寺・高天、山麓の里々を上りすぐれば、いよ〳〵金剛山の搦手なり。

搦手

雨はをやみぬ。いざや此のひまに一氣にのぼらばやと、草鞋の紐一締してさしかゝる。老杉森々として道暗く、木の根岩かど岈々として胸つくばかりなり。げにや徒らなる一歩も許し難し。天然の險要、さすがに名將の選ぶ處よと、覺えず獨言せられつ。

岈々

やゝ上れば、大樹はいつしか麓に去つて、一山天空に開け、葛城・宇智一帶の山も、川も、里も、田も、皆近く我が足下に在り。

しばし佇みて快感を擅にすれば、何處よりか湧出でつる白霧、むら〳〵と動き來りて、里を沒し、野を奪ひ、山を消し、つひに四隣を埋めはてつゝ、漠々たる白雲の虛空に我を棄てぬ。

事ならばまこと此の身をすててまし、

金剛の山白雲の國。

また思へば、

雲霧の漲るくにに一人立ちて、

荊棘

掃ひ勇みし太刀の主はや。

雨また至つて、いつしか袖のしとどなるに心づき、またたどり上る程に、霧は散じつくして路やゝ平かなり。見上ぐる限り、見渡す限り、緑にさむる荊棘の山に燃ゆるばかりなる岩躑躅の花は、深紅の色に咲きみち、處々に紫の藤かゝれり。

美しくゆかしき人の昔をば
語るに似たる山の色かな。

老杉また陰々として、路再び險峻。一歩前なる人の踵は、我が頭上にあり。これを最後の難所にて、峰をやゝ行けば、葛城神社の假殿の在る處、やがて國見

四阿家

草莽

山に出づ。金剛山の絶頂にして、社殿の背の一段高き所を楠公城見の跡といふ。公が千早の築城に肺肝を碎かれしところなりとか。唯數歩の淺茅生の中央に、屋根ばかりの四阿家の立てるのみ。老杉一本、直幹蒼穹を凌ぎて立つあり。攝・河・泉三州、さては瀬戸灣を指呼の中に眺めたる壯觀は、唯草莽の身を以て、回天の大業に任じて立ちたる公が當年の意氣に似て、自ら襟の正さるゝを覺ゆ。千早城址は、これより下りて二十八町の山腹にあり。

掘りとほしたる如き赤土を下る。急路なれば、一度ふみ出したる足は、容易く止るべくもあらず。十

三町を下りたる處に楠公祕水の跡といふあり。もと金剛山寺に詣づる山伏等が見出でて、渴を醫するに用ひ來れる五箇の井にて、大旱といへども涸れず。五個の祕泉と號す。公よくそれを知りて、千早籠城の用水の一つに用ひたるなり。今は二箇所の小さき窪みに、僅かに水のたまれるのみ。落葉をかきわけて一掬し、

かきわくる落葉の下の埋れ水、
世に忘られぬ君が眞心。

（塩井雨江）

一八　茶道の義氣

「正*則常に物荒く人を誅することを好む。」と世の人言ひ合へり。或時、近習の士すこしのとがありしに城内の櫓に押籠めて、「食物を與へず、餓死せしめん。」と言はれしに、其の士の恩を受けたりし茶道坊主、させる罪なくて、かゝる有樣なるを痛み、夜潛に、燒飯を携へ行きたり。彼の士「我は罪ある故にかくなりたり。汝只今の振舞を殿聞召されなば、われよりも罪おもからん。又、飯を食ひたりとて命助かるべきにあらざれば、疾くかへれ。」と言ひしに、茶道言ひけるは、「同じ罪に行はるとも後悔なし。われ先に既に殺さるべき事のありしに、君の救にて一度助かり候ひぬ。恩

貽る

を受けて報ぜざるは人にあらず。こなたも又弱げなる心おはして、わが志を空しくし給ふこそ口惜しけれ。」と言へば、彼の士悅んで、「さらば、」とて之を食す。夜毎にかくの如くしたりけり。

程經て、「死したるならん。」とて、正則櫓に行かれしに、顏色少しも衰へず。正則「さては飯を貽りたる者あらん。」と怒られしに、茶道來り、「某こそ貽りたれ。」と申す。正則はたと睨みて、「おのれ何故にかくしたるぞ。頭二つに切割りなん。」と膝立直されし時、茶道少しも騷がず、「われ昔罪を得て、既に水責にあひて殺さるべかりしに、彼の人の申開きたりしゆゑ、今日まで思ひが

竭くす

けず命ながらへ候ひぬ。其の恩を報ぜん爲、毎夜忍びて食を運び候。」と言ふ。正則怒れる眼に涙を流し、「汝が志感ずるに餘あり。人はかくこそ有るべけれ。彼の士をも宥すべし。」とて、其の儘櫓の戸を開きて罪をなだめ、茶道をも深く賞せられけり。されば、暴惡の人と世に稱しけれど、かゝる義に感ずることの切なる故に、士の思ひ慕ひ力を竭くし、正則の爲に身を棄てて奉公しけるも故あることにこそ。（湯淺常山）

二〇　英雄の半面

世に英雄豪傑と稱せらるゝものは、唯强いばかり

の人ではない。その剛強な一面と、その赫々たる勳業の表とを見たばかりでは、眞の英雄の面目を知つたといふものではない。左の二つの事蹟はこれをよく事實の上に證明したものではあるまいか。

上杉謙信が或夜、石阪檢校に平家を語らせて聞いた。

檢校

鵺

鵺の段に至つて謙信頻りに落涙した。傍の者共が、かゝる勇ましい物語を聽いて泣かれるのは、如何したわけだらうと異しみ思ふ樣であつたから、謙信は、「あゝ我が國の武術も衰へた、殘念な事だ。昔鳥羽院の御時、禁中に妖怪が出た事があつた。八幡太郎が庭上で鳴弦をして、鎭守府將軍源義家と名宣りをあげた所が、妖怪は忽ち消えたと傳へてゐる。その後、この賴政は鵺を射落したが、死なかつたので、猪隼太がこれを刺して殺した。といふではないか。義家の鳴弦をなしたのは天仁元年の事で、鵺の出たのは近衞院の仁平三年であるから、僅かに四十六年の違であるのに武德は斯う甚だしく劣つてゐる。今は賴政の時から四百五十年は經つてゐるのであるから、自分の武も亦遙に賴政に劣つて居るのであらうと思つて、覺えず落涙した。」と其の胸中を語つたといふ。

此とよく似た話がある。相州北條の幕下で佐野

の城主をした天*德寺といふ勇將があつた。或時、琵琶法師に平家を語らせて聞いた事があつた。豫めおれは哀れな事が聞きたいから、その積りで語れ。」と言つて置いた。法師は「承知致した。」といつて、やがて、佐々木高綱が宇治川の先陣をした條を語り出した。すると、曲半ばに天德寺は雨雫と涙を流して聞いてゐた。夫から「今一曲前の樣にあはれな事を聽かせよ。」と注文したので、法師は那須與一が扇の的を射る條を語つた。やはり半ば頃になると天德寺は切りに泣いてゐた。其の後數日經つてから、天德寺は側近の者に「この間の琵琶はどう聽いたか。」と聞いた。

一同は「まことに面白く覺えましたが、唯一つ心得ぬ事が御座いました。二曲ともに武者の勇氣、功名の物語で、哀れな事は少しも御座いませんのに、君には感涙に咽んでおいでになつたやうに見受けました。其の事が今に不審で御座います。」と申した。之を聞いた天德寺は驚いて、「只今までは各々を賴もしく思つてゐたが、今の一言を聞いて力を落したぞ。先づよく佐々木が事を心に浮かべて見よ。右大將が、御舍弟の蒲冠者にすら賜らず、寵臣の梶原にも賜はらなかつた程の名馬生喰を戴いて出陣致したぢやないか。その甲斐もなく宇治川の先陣を人に讓つた

ら、必ず討死して再び御目には懸らぬと申して、暇乞して鎌倉を去つて來てゐるものではないか。彼が當時の心を思へば、哀れでない事がどうしてあらう。」と語つてまた涙を拭つた。暫くして、「また那須與一にしても、人多き中から選ばれて、唯一騎陣頭に出てから、馬を海中に乘入れて的に向ふに至るまで、源平の兩陣は鳴りを靜めて、之を見物したといふ。若し射損じたら、身方の名折れ、馬上に腹を切つてしまはうと思定めた覺悟を察して見よ。弓矢執る身ほど哀れな者はあるまい。自分も、いつも戰場に臨んでは、この高綱や宗高が心で槍を執つて居るので、彼の平家を聞いては、我が心中に引較べて覺えず落涙したのであるぞよ。先刻の言葉の樣子では、各〻の武はただ一旦の勇氣に任せたもので、眞實の心から出るものでないらしい。それではどうも賴もしくない。」といつて歎息したといふ。

謙信といひ、天德寺といひ、唯事柄の表面のみを見ないで、自分の心を推して他人の胸の中に入れて、その胸底の祕を讀んで、眞によく他を理解し同情した心は、まことに貴いものである。斯うした溫かな心があり、同情があればこそ、多くの賴もしい家來をも懷けたのである。半面に斯うした慈母の如き心の

あるのが、眞に英雄の英雄たる所だといつても敢へて過言ではあるまい。

二一　酒井忠勝

由井正雪の擧、まことは紀伊大納言頼宣卿の内命によるよし、彼の徒白狀し、それがさし出したる數通の内命書を檢査するに、大納言家の判形、紛ふべくもあらざりければ、井伊掃部頭直孝始め、時の老中、いづれも大いに心を惱まし、「浪人のみの事ならんには、いか樣の結構なしたらんにも、もとより深く憂ふべきにあらず、唯紀伊家に基づく事ならんには、後日の事

ども測りがたし。所詮御三家方一同を殿中に召させられ、豫て究竟の兵を便宜の所に伏せおきて、事の樣によりては、紀伊家を搦め申さばや。」と密議す。酒井忠勝進みいでて、「御判形紛れなき樣には見ゆれども、なほ親しく引合せ、其の上委しく糺し申したる上ならでは、眞僞の程は決し難し。されば某紀伊家へ參り向ひて、大納言家へ御直に承るべし。」といふ。直孝聞きて、「そはさる事ながら、是より赴かん事いと危し。いかなる變の生ぜんも圖り難し。」といふ。「いやいや、忠誠のある所、天下に恐るゝもの何かあるべき。」とて、やがてかの内命書を携へて行向ふ。

所勞

謀書

大納言家所勞の由なりければ、御寢所にて苦しからぬ旨申して、御前にいで、「世にはいたづらものの候うて、かゝる謀書を作りいだし、御難儀かけ參らせんと謀りて候。」これ御覽あるべし。」といひさま、つかつか卿の膝下にさし寄りたる勢、忠烈形にあらはれて、列座の家司を始めとし、近臣いづれも愕然たり。忠勝更に申しけるは、「此の書固より謀書にて候はんなれども、なほ御判形と合せ見候べし。」とて引合せ、「御判形は巧みに似せて候へども、墨色大いに違ひ候樣に見奉る。されば、此の證書は無用の反古に候へば、燒棄つべきものに候。」とて、即ち之をひきやぶり、「申すまでもなき事に候へども、御判形は大切のもの故、御身近く召使はるゝ人と申さんにも、御油斷なからんこと、肝要の事に候。」と申す。卿此の時はじめて口を開かれ、「かの書の事は、いさゝか覺えなし。さりながら判形あるからは、近習の者といへども、油斷すべきにあらず。」とて、詰めあひ居たる近臣の方を打見やられければ、扈從なる加納某、靜かに默禮して席を立ち、緣に出づと見えたりしが、忽ち腹をぞかき切つてける。されば、正雪が事は、全くかの徒黨の者に止り、事故なくてをさまりぬること、まことに忠勝がはからひ其の宜しきを得たるに依るとぞ聞えし。

大身

加納が腹切りたるは、御判ぬすみし申譯とは聞えたれど、實に然りしや。其の子平治右衞門は、幼年にして父にわかれ、熊野の奥にて生長せしが、光貞卿の時に至りて召出され、次第に祿を加へられて大身となりぬとぞ。

（中村秋香）

二二　扇の的

弓手

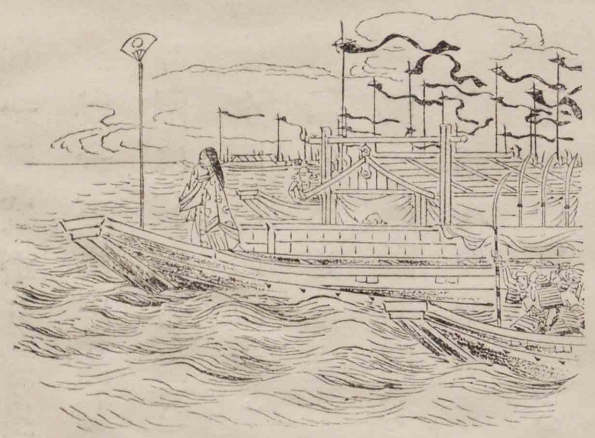
與一は馬をうちよせて。
弓手の沖を見渡せば、
御座の御船や女官の船、
屋形々々の前うしろ、

几帳

馬手

御簾・几帳もさざめけり。

馬手の沖には楯・甲、
兵船數百漕ぎ竝べ、
鳴りを靜めて平家の一門、
陸にはもとより源氏の勢、
大將義經を始めとし、
阪東の弓取數千騎、
今日を晴とぞながめける。
處は海も遠淺の、



神祇
冥加

一段ばかり乗出でしが、
與一が馬は沛芟の、
潮に狂へる折こそあれ、
夕西風の吹立ちて、
船の的さへ定まらず。
與一は眼を閉ぢ氣を凝らし、
「南無八幡・大小神祇、
弓矢の冥加あるべくば、
的の扇を鎭めたまへ。
源氏の武運極りて、
家の果報も盡くべくば、

鏑矢

我をば海に沈めたまへ。」と、
祈念を終へて目を開けば、
扇は座にぞ鎭まりける。
抜きたる鏑矢は十二束、
弓に番ひて引固め、
みやる的はあなおそろし、
天津日影の御影なり。
要の程をと志し、
ひやうと放つ矢心地よく、
かつちと答へて要は船、
扇は空にひらめきて、

海へさつとぞ入りにける。

平家の勢は舷をうち、
源氏は箙、鞍の前輪
一度に叩き、聲々に
射たりや射たりと喝采す。
元暦元年彌生の末、
西日落つる壇の浦、
那須與一宗高が
譽ぞ今に殘りける。

（明治讀本）

箙

二三　學生日記

仕事師

十二月二十五日。晴。今日より休暇となりて、身體伸びく〳〵す。冬の日影ほか〳〵と障子を透きて、山茶花の花二三映れり。昨日までの學校の忙しさを想へば、夢の如し。

仕事師門松を立てに來る。門に出でて見る。例年よりも大きなるを立てたり。隣家山田君の宅は忌中にて立てず。

家に入らんとする時、郵便脚夫、*クリスマスの美しき*カードをもたらす。永井君のなり。直ちに豫て

讃美歌

求め置きしカードを贈りて答禮す。

夕、同君を訪ひて、クリスマスの式に列なる。飾られたる常磐樹に映る燈影、あかく神々し。樂の音、讃美歌の聲、莊嚴の氣、和樂の象、交〻君が家に滿つ。更けて出づ。星多き夜なり。

二十六日。曇。終日、父上の年賀狀の表書す。五百枚書きあげしは、夜の九時頃なり。鉛筆やペンのみ持ちし手の、久々にて筆を執りし故にや、肩張りて堪へ難し。入浴して臥床。

二十七日。晴。午前、父上小遣を餘分にたまひたれば、中西屋に駈けつけて、新著のスタヂオ*を求む。

藝術鑑賞

新粧目まぐるし

歲暮の街の賑しき中を、此の書かゝへて欣々として歸る。早速披き見て、外國の進歩せる藝術に驚く。

折柄、田中君來る。共に展觀して、鑑賞夕に至る。歸らんといふ同君を強ひて、夕飯を共にす。夜、同君と共に出でて、雜誌屋の店頭に立つ。新年號の各種累累として、とりどりの新粧、目まぐるしきばかりなり。妹の爲に少女世界を求む。

二十八日。晴。事なし。

二十九日。同前。

三十日。晴。午前、永井君よりカルタの練習に招かれたれど、行かず。午後、妹の友垣五六人打連れ來

り、庭上にて羽子つき交はす。

三十一日。曇。友人への賀狀に、十枚ばかり犬を畫く。妹傍より見て、「猫の樣ですね。」と云ふ。「お前にも何か畫いて上げようか。」といへば、笑つて頭をふる。

一月一日。雨。後、晴。朝、起きしばかりの處へ、田中君盛裝して來る。予が寢ぼけ顏を見て、「去年とやいはん今年とやいはん。」といふ。此の君は、級中第一の歌人として推稱せらるゝ人。上らずして去る。雜煮を食べ居る時、妹みそつ齒を落す。予大いに笑ふ。父上も母上も、厭な顏せらる。

盛裝

推稱

午後、新聞の初刷來る。犬の繪に、これはといふものなし。予の例の猫犬も、全然棄つべきにあらずと思ふ。父上へは年賀狀百通ばかり來りたれど、予へは一枚も來らず。夜「寶船」「寶船」と賣りあるく聲す。

二日。晴。後、曇。來れり來れり、一時に五六枚。然も繪葉書ばかりなり。藤堂君の愛犬を寫生せしもの、最も見るに足る。尋いで英文の賀狀來る。差出人の名を逸せり。新年早々、そゝつかしき事かな。父上の追加の賀狀、百枚ばかり表書す。

夜、左隣の家よりカルタ會に招かる。母上妹と行かる。夜更くるまで賑かなる聲止まず。

三日。四日。五日。風邪の氣味なれば、引籠りて

新年の雜誌を讀む。

六日。晴。朝、近藤君・中村君來る。連立ちて今井先生を訪ふ。先生歡んで迎へられ、「休暇中、何か面白い事があつたかね。」と問はる。予、先づ「何もありませんでした。」と答へけるに、「君等の年配の時分は、正月が面白いものだが。」といはる。それより、「こんな歌を詠んだ。」と示さるゝを見れば、勅題「新年雪」を詠ぜられたるなり。夫人の御手料理を戴き、夕刻辭して歸る。

七日。晴。休暇も今日限りなり。何となく心の淋しさを感ず。夕、門毎の松取除かる。風寒し。

（日記文範に據る）

二四　蛙

自分の今寢ころんで居る側に、古い池があつて、其處に蛙が澤山ゐる。

池のまはりには、一面に蘆や蒲が茂つてゐる。其の蘆や蒲の向うには、背の高い白楊の並木

が、品よく風に戰いでゐる。その又向うには、靜かな夏の空が見えて、そこには何時も、細い硝子のかけのやうな雲が光つてゐる。さうして其等が皆實際より遙に美しく池の水に映つてゐる。

蛙は其の池の中で、永い一日を飽きず、ころころ、かららと鳴きくらしてゐる。ちよいと聞くと、それが唯ころころ、かららとしか聞えないが、實は盛んに議論を闘はしてゐるのである。蛙が口をきくのは、何もイソップの時代ばかりと限つて居る譯では無い。

中でも蘆の葉の上にゐる蛙は、大學教授のやうな態度でこんな事を言つた。

「水は何の爲に在るか。我々蛙の泳ぐ爲にあるのである。蟲は何の爲にゐるか。我々蛙の食ふ爲にゐるのである。」

「ヒヤア、ヒヤア」と、池の中の蛙が聲をかけた。空と草木との映つた池の水面が、殆ど埋れる位な蛙だから、贊成の聲も勿論大したものである。丁度その時、白楊の根元に眠つてゐた蛇は、此のやかましいころろ、かららの聲で眼をさました。さうして、鎌首を擡げながら、池の方へ眼をやつて、まだ眠さうに舌舐めずりをした。

「土は何の爲にあるか。草木を生やす爲にあるの

である。では、草本は何の爲にあるか。我々蛙に陰を與へる爲にあるのである。從つて、全大地は我々蛙の爲にあるのではないか。」

「ヒヤア、ヒヤア。」

蛇は、二度目の賛成の聲を聞くと、急に體を鞭のやうにぴんとさせた。それから、そろ〳〵蘆の中へ這ひ込みながら、黑い眼を輝かせて、注意深く池の中の樣子を窺つた。

蘆の葉の上の蛙は、依然として大きな口をあけながら、辯じてゐる。

「空は何の爲にあるか。太陽を懸ける爲にあるのである。太陽は何の爲にあるか。我々蛙の脊中を乾かす爲にあるのである。從つて、全大空は我我蛙の爲にあるのではないか。既に水も草木も、蟲も、土も、空も太陽も、皆我々蛙の爲にある。森羅萬象が悉く我々の爲にあるといふ事實は、最早何等の疑を容れる餘地が無い。自分はこの事實を諸君の前に闡明すると共に、併せて全宇宙を我々の爲に創造した神に、心からなる感謝を捧げたいと思ふ。神の御名は讃むべきかなである。」

森羅萬象

闡明

蛙は空を仰いで、眼玉を一つぐるりとまはして、それから又大きな口を開けて言つた。

「神の御名は讃むべきかな……」

さういふ語がまだ了らない中に、蛇の頭がぶつかるやうに伸びたかと思ふと、此の雄辯なる蛙は、見る間に其の口に啣へられた。

「からら、大變だ。」

「ころろ、大變だ。」

「大變だ、からら、ころろ。」

池中の蛙が驚いてわめいてゐる中に、蛇は蛙を啣へたまゝ、蘆の中へかくれてしまつた。後の騷ぎは、恐らく此の池の開闢以來、未だ曾てなかつた事であらう。自分には其の中で年の若い蛙が泣き聲を出しながらかう言つてゐるのが聞えた。

「水も草木も、蟲も土も、空も太陽も、みんな我々蛙の爲にある。では蛇はどうしたのだ。蛇も我々の爲にあるのか。」

「さうだ。蛇も我々蛙の爲にある。蛇が食はなかつたら、蛙はふえるに相違ない。ふえれば、池が——世界が必ず狹くなる。だから蛇が我々蛙を食ひに來るのである。食はれた蛙は、多數の幸福の爲に捧げられた犧牲だと思ふがいゝ。さうだ、蛇も我々蛙の爲にある。世界にありとあらゆるものは、悉く蛙の爲にあるのだ。神の御名は讃むべき

かな。」

これが、自分が聞いた年寄りらしい蛙の答である。

（芥川龍之介）

二五　古寫眞

昨日、日曜の暇に、書齋の整理をすると、古い寫眞を見出した。最早二十年近くもなつて居る上に、昔の幼稚な寫眞術で撮つたのだから、一體に茶色にぼけて、人の顔は幽靈の樣に見える。何でも四五十人もあらう、立つたり踞んだり、腕まくりして肩を怒らしたり、澄ましたり笑つたり、樣々な態をして居る。見

耐ふ

顴骨稜々
精悍

るから耐へ難いなつかしさが、水の如く身にしみた。

右の端に、雲つく大男の陰から「僕も一口加へてくれ給へ。」と云ひ顔に、ちよこりんと小さな顔を出して居るのは確に僕だ。きつと口を結んで、頰の何處やらに笑ひを浮かべて居る。あゝ、是が二十年前の僕か。

眞中の顴骨稜々、精悍の氣面に溢るゝ長髯の人は、西山先生では無いか。先生の左に、につこり笑つて居る、あゝ、是が彼の髯嚴めしい紳士の松村か。あゝ小松、彼は家が貧乏であつたか、四季、袷一つで通して、虱が居ること實に夥しいので、王猛先生のあだ名が

筒袖
俊敏
匹敵

あつた。　また、汗や、脂や、醬油や、種々の物に汚れた其の袷は、彼が起居する毎に、實にいふ可からざる奇臭を發するので、有名なものであつた。　山鹿と云ふのは僕に一歳上だが、如何にも鼻汁が出る癖があつて、其を筒袖で拭くので、彼が左右の袖は、糊をした樣に光つて鯱張つて居た。　金井と云ふのは俊敏にして、氣を負ふ少年で、滿足な著物をわざ〳〵綻ばし、羽織の紐は引切つて、觀世撚で結んで居た。　河喜多と云ふのは、見上ぐる程の大男、力も智慧も牛に匹敵する人物で、何時も、菓子をそつと持つて來ては、僕に八大家の素讀を習つた。　志方といふ兄弟は、喧嘩ばかり

列傳
運命

して居て、或時、家許から先生に雉子を持たせてよこしたのを、「卿持つて行け」「あなた御出で」と兄弟互に讓り合つて、七日も八日も經つて、やつと二人で持つて行つたが、最早其の時は、腐敗しかけて居たさうな。

荒井といふのは、非常に怒りつぽいので、「消炭」と云ふあだ名があつたが、火の樣に怒つたあとは、水の樣に沈んで、三日も四日も妙に鬱いで居るのが癖だつた。若し一々記憶を呼起したら、一部の列傳を成すも容易な事だ。

あゝ、人間の運命はわからないものだ。　同じ釜の飯を食つても、身の行末は實に千差萬別。　二十年前、

無頼
沙汰

一枚の寫眞に顔を竝べた西山塾生の中には、未だ四十にならずして、最早姓名を不朽の卷に彫つた人物もある。或は村長をして居る者もある。縣會議員もある。俊秀の才子、身を誤つて車夫とまで墮落した者もある。又、悲しいかな、道を失して無頼の徒とまでなつた者もある。一滴の水が大海に落ちた樣に二十年來杳として音沙汰もなくなつた者もある。寫眞の顔を見れば、いづれも活潑に、無邪氣に、すぐれて秀でた人もなく、また惡人も居ない樣だが、實際の運命は、實にさまざまで、人生の不可思議、思へば實に暗涙に堪へない。

（德富盧花）

赤手
匙（七）

二六　貧窮の利益

倫敦デーリーニュース記者、嘗て北米の大富豪アンドリュー、カーネギー氏に對ひて、「赤手にして巨萬の富を獲取し得べき者の資格は如何。」と問ひけるに、氏は答へて、「その資格の第一は、貧家に生れて貧家に生立たんことなり。彼の生れながらにして銀の匙を手にする者は、終に富豪たるべき資格なし。極貧に處し、死するか活くるかの窮境に陷りて、そこに家庭の和樂と安寧とを味はひ知り、尙一家離散の慘狀を見せずばやまじと迫り來る貧乏の追窮より、如何

垂死

にもして脱せんとの大決心を固めたる者にあらざれば、斷じて眞の富豪となること能はず。人は斯かる境に立ちてこそ、始めて其の全能力を發揮し得るものなれ。」といひしとぞ。

げに、氏の幼時は、悲慘極れるものなりき。十一歳の時、或夜更けて、父の外より歸り來れるを見れば、其の顏色青ざめて、恰も垂死の人の如し。さて其の母と打語らふを聞けば、終日奔走しけれども、つひに職を求むること能はざりければ、今ははや、他に策を講ずるの已むを得ざるをかこてるなりき。氏は之を聞きて、子供心にも、悲哀・痛恨の念胸に溢れ、いで、力の

かぎり命のかぎり働きて、此の恐るべき貧苦を、わが家の門より追拂ふべしと、堅く心に誓へりといふ。

斯くて一家は、終に年久しく住みなれし英國を後にして、覺束なくも遠き米國の空を志しぬ。

千八百四十八年、秋もはや末つ方、氏の一家は米國に著し、少しの知るべをたよりて、ペンシルバニア州のピッツバーグといへる處に、はかなき住居を構へぬ。斯くて氏の新しき奮鬪的生活は、こゝに其の端を開くこととなりぬ。

汽罐

信使

翌年の秋、十二歳の時、氏は僅かの給料にて木綿工場に雇はれ、毎日、日出前より日没後まで、間斷なく絲卷きの業に勵みぬ。居ること一年にして、汽罐の火夫となれり。漸く十三歳に達せる少年に取りては、こは實に堪へ難き重荷なりき。されば氏は夢寐にも安んずること能はず。中宵枕を蹴て起ち、汽罐の熱度を檢するの態をなしこと、屢、なりしといふ。

十四歳の時、氏は市の電信局の信使となりぬ。氏の喜譬ふるに物なく、益〻誠實にその職を勤めたりき。後年、氏當時を想ひ出でて、「卓上には書籍あり、新聞紙あり、ペンあり、インクあり、鉛筆あり、紙ありき。使の

暇には、余は是等を使用する事を得たり。あゝ、余は實に暗黑を出でて光明につき、地獄を去りて極樂に入りたる感ありき。」と語りしとなん。絲卷きの時より勤勉遙に人に過ぎたりしが、茲に至りて一層その度を層し、信使の職を勤むる傍、電信の技を習得し、二年にして遂に電信技手となれり。斯くて其の技能は日を追うて進み、當時米國の電信技手中、耳に聽きて直ちに電文を解する者、氏を措きては他に一人だになかりしと云ふ。其の技術の熟練、以て知るべきなり。さればその昇進も甚だ速く、十六歳の時には、五磅の月給を受くることとなれり。氏が立身の登

龍門ともいふべきスコット氏の會社に關係を有するに至りしは、實に此の際の事なり。

氏の奮鬪は、斯くの如くに慘憺たるものなりしが、氏は家庭に於ては、決して不幸なるものにあらざりき。涯りなき慰藉と光明とは、こゝに見ることを得たり。父は取立てて云ふほどの人にもあらざりしが、母なりし人は敬虔にして慈悲深く、常に蜜の如き甘き慰撫と、光の如き強き奬勵とを以て氏に臨みしかば、身體綿の如くに疲れ、氣息奄々として歸り來れども、翌朝は旭日登天の英氣・希望を以て、再び生活の征途に上ることを得たり。

敬虔

奄々

富、王侯を凌ぐ今日に於ても、氏が猶貧乏の利益を主張し、窮厄の幸福を說いて止まざるもの、全く此の時代の尊き經驗より來れるなり。

（實業青年國語漢文讀本）

二七　麥　笛

緩やかな傾斜をなして、小さな丘が前に横たはつてゐる。丘には、麓から頂まで一面に、麥の葉がやゝ黃ばんで、長く揃つた穗が波打つてゐる。

おほ空はくつきりとは晴れて居ない。白い雲が薄い綿を敷きのべたやうに一面に廣がつて、其の薄切れした間から、柔かな青空が透いて見える。ほん

のりと白い光が天をも地をも包んで、いかにも柔かな感じが天地の間に充ちくてゐる。

丘の麓からすこし隔たつた麥畑の中に、私は身を横たへて丘を見上げてゐた。なだらかな丘の頂に波打つ麥の穗が天際を劃して、其の後にこんもりした黒い森の梢が、半ばより以下は麥の丘に遮られて見える。

劃す
遮る

緩い風がすういすういと麥の葉の上を滑つて行く。薄い白い雲をすかして、さして強くもない日が、一面に光を散らす。麥の葉と穗との中に取卷かれながら、草の上に肱をつき頰を支へて、身を低く伸ばしてぢつとしてゐると、眞晝の風の麥の葉に囁く詞も聞取るばかり靜かである。

風の音に耳を傾けてゐると、何とも取り止めのない寂しい懷かしい思が胸をめぐる。幼時の事や、ふる郷の景色やが、眼前を閃くやうにして過ぎる。此の甘い懷かしい回想が、殺風景で切實な現實の中のオアシス*であるかのやうな氣がする。

手近な麥の一本をとつて、長い莖を拔いて、莢のやうになつてゐる所を唇に當てて、息を吹き込んだ。悲しい震へるやうな音を立てて、其の麥笛は一しきり鳴つた。また吹いて見た。大豆の葉の茂り合つ

莢

て居る畑の間を、隣の村へ通ふ一筋途、その上を夏の正午頃、飴賣の老爺が一種悲しいやうな音を立てて笛を吹いて行つた我が少年時代の故郷のことが思ひ出されて來た。　其の飴賣の老爺は、今も同じ荷を擔いで、あの同じ豆畑の間を笛を吹きながら通つてゐるのではあるまいか。

風が少し強く吹いて、麥の葉ずれの音が高くサラサラ鳴つてゐる。　眼を上げて見ると、森の上から丘の彼方へ白い冢の樣な形をした雲が、低く麥の穗波の上を滑るやうに通つて行く。　雲は畑中に自分が臥てゐるとも知らず、眞晝の靜かさに乘じて、遊行し出したのではあるまいか。

丘の頂に立つて向うを見たら、何の樣な景色が展望されるであらうと思つて、私は立ち上らうとしたが、また此の眞晝の靜かさを破るにも忍びないやうな氣がして、其のまゝ暫くぢつとして草の上に横になつてゐた。

（吉江孤雁）

中等新讀本卷二終

廣島高師附中專心寮

一北

林 薫 林

註釋（卷二）

〔摘出語句の下の括弧内の數字は、卷中の頁を示したものである〕

○横井小楠（二）　通稱平四郎、肥後熊本藩士。明治維新の際朝廷に出でて參與となる。明治二年保守派の人に忌まれて殺された。

○村上義光（七）　ヨシテルと訓む。護良親王に隨つて所々に戰ひ、遂に吉野でその御身代りとなつて戰死した。

○護良親王（八）　後醍醐天皇第三の皇子。渡邊義博に弑せられた。御年二十八。

○二階堂貞藤（八）　北條高時の命を受けて、吉野千劍破等を攻め、後南朝に降つたが、間もなく又謀叛して誅せられた。

○佐賀の亂（二八）　明治七年江藤新平等が佐賀に起した亂。

○鳥尾（二八）小彌太。子爵、陸軍中將、長門の人。維新の際功があつた。後近衞都督・樞密顧問官となつた。明治三十八年薨、年五十九。

○北條早雲（四〇）　長氏、文明八年姉の夫今川義忠に依り、北條茶々丸を殺して伊豆韮山に居つた。明應四年小田原を取つた。永正十六年沒、年八十八。

○ファールマン式（四三）　ファールマンは佛國人。此の人の發明にかゝる飛行機は複葉。

○ブレリオ式（四四）　ブレリオは佛國人。單葉飛行機を製出す。始めて英蘭海峽を飛行横斷した人。

○プロペラ（四四）　推進器。飛行機の前頭又は後部に在つて、發動機の力で、烈しく回轉して飛行機を進めるもの。

○アブラハム、リンカーン（四六）　北米合衆國第十六代の大統領。一八〇六年大統領に選ばれ、一八六四年再選され、一八五六年暗殺された。

○ケンタッキー（四七）　北米合衆國の一州。オハイオ河の流域に在る。

○二宮尊德（五六）　幼名金次郎。相模の人。勤儉力行の人。安政三年死、年七十。

○アルベール皇帝（五七）　白耳義現時の皇帝。

○ブリュッセル（五九）　白耳義の首府。セーン河岸にある。

○リエージ（六一）　白耳義リエーヂ縣の首府。
○アンウエルス（六一）　又アントワープ。白耳義著名の都市、海港。
○カレー（六一）　ドーバー海峽に在る佛國の海港。
○オバーウエゼル（七九）　ライン河の邊に在る都市
○萃因（ライン）（七九）　歐洲大河の一。源を瑞西に發して、獨逸を流れ、和蘭の海に入る。
○白襷隊（八七）　第三回旅順口總攻擊の時、目じるしのため士卒白襷をかけて夜間突擊を試みた隊。
○聯隊長（九一）　步兵第一聯隊長寺田中佐。
○岩村海軍參謀（九八）　岩村團次郎、當時海軍中佐
○佛光禪師（一〇一）　守中、薩摩人、日向法華寺の第一世。永泰・天福・萬年寺等を開く。天正十二年寂、年七十。
○正則（一〇九）　福島正則。秀吉の臣、尾張人。賤ヶ岳七本槍の一。安藝備後四十九萬石に封ぜられたが、元和年中に國を除かれた。寛永元年卒。
○天德寺（一一四）　佐野了伯、秀吉の臣（二二一八—二二六一）
○酒井忠勝（一一八）　德川家光に仕へ、大老となる寛文二年沒。年七十六。
○紀伊大納言賴宣（一一八）　家康の第十子。紀伊和歌山の城主。寛文十一年薨、年七十。
○井伊掃部頭直孝（一一八）　近江彥根の城主。德川家康四天王の一人。家康から四代將軍まで仕へた萬治二年歿、年七十。
○クリスマス（一二七）　キリストの誕生祭。毎年十二月二十五日に行ふ。
○カード（一二七）　クリスマス、カードと稱ふ。クリスマスの時友人などの間に贈物にするもの。
○スタヂオ（一二八）英國にて刊行する美術雜誌。
○倫敦デーリーニュース（一四五）　英國倫敦（ロンドン）で發行する新聞紙の一つの名。
○アンドリユー、カーネギー（一四五）米國の大富豪銅鐵業家で、慈善家、もと蘇蘭の生れ。
○ペンシルバニア州（一四七）　北米合衆國の一州。ニューイングランド中第一の農業地。
○ピツツバーグ（一四七）　ペンシルバニア州の西南部に在る都市。

大正十年十月廿七日印刷
大正十年十月三十日發行
大正十一年一月廿七日訂正印刷
大正十一年一月三十日再版發行
大正十三年四月一日印刷

著作者　藤村作

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地
發行兼印刷者　大日本圖書株式會社
右代表者
專務取締役　杉山常次郎

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地
大日本圖書株式會社
郵便振替貯金口座　東京二一九番

發行所
各府縣下特約販賣所

中等新讀本奥附

定價
卷一　金參拾七錢
卷二　金參拾六錢
卷三　金參拾四錢
卷四　金參拾參錢
卷五　金參拾貳錢
卷六　金參拾錢
卷七　金參拾參錢
卷八　金參拾錢
卷九　金參拾參錢
卷十　金參拾參錢

大正十三年度臨時物價金六拾五錢

不許複製